

8章 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用

この章は、教育リソース・デジタルアーカイブの利活用を検討をせよ。

～各自でまたは他の先生方と調べ検討をされたし～

先生方への課題です。

- ・ 8の1～5の中で、指導経験のある項目があれば、まとめて記述しておいてください。
- ・ また、近くに、経験のある先生がおられたら、ぜひ、話を聞いてまとめておいてください。
- ・ また、参考図書等を見られて、理解できる事項もぜひ、まとめておいてください。

◎個別学習の講座でも関係事項についての説明があると思います。

ぜひ、整理し、まとめておいてください。

(注) 教育リソース・デジタルアーカイブ、個別学習の自動化等の講座での学びでまとめてください。

現在、理解されている項目のみ記入し、残りは課題等の講義で説明をまとめてください。

8. 教育実践研究資料の教育リソースの活用例

8—1. 課題解決の学習での利活用

8—2. 教育実践研究資料の活用

8—3. 個別学習での教育リソースの利活用

8—4. 教育リソースの学習指導計画、授業分析での利活用

8—5. 学びでの情報(教育リソース・デジタルアーカイブ)の利用について

～DIKWモデルの観点から～

～先生方は、情報をどのように利用されているか～

[巻末資料]

8—6. 修学旅行での教育リソース・デジタルアーカイブの利用

～観光情報としての利活用～

[巻末資料]

8—7.【参考】A 小学校の教育実践の成果

[巻末資料]

8—8. 教育リソース DA を利用した学校文化の形成(宮城先生の実践例)

～学習指導力、学力の向上に適用～

8—8—1. 教頭だより

8—8—2. シンポジウムより実践例の紹介(宮城卓司先生)

8. 教育実践研究資料の教育リソースの活用例

8—1. 課題解決の学習での利活用

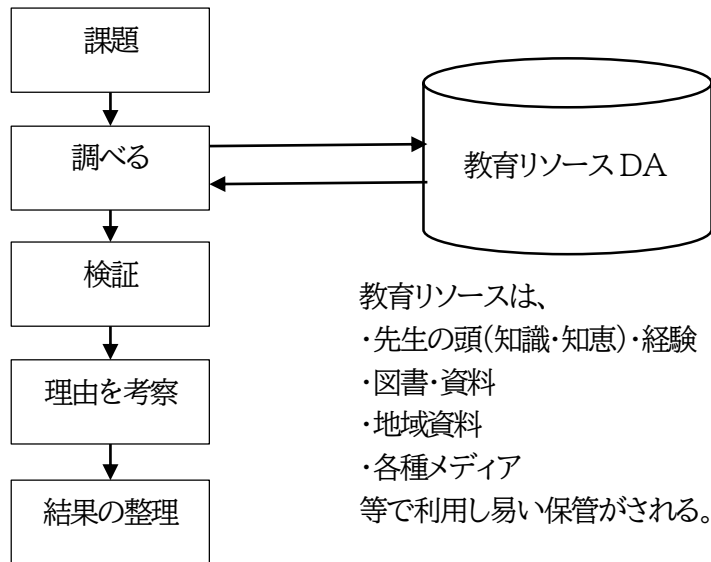


図8-1

(1) 教育リソース DA を用いたオープン教育での課題解決の学び

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用

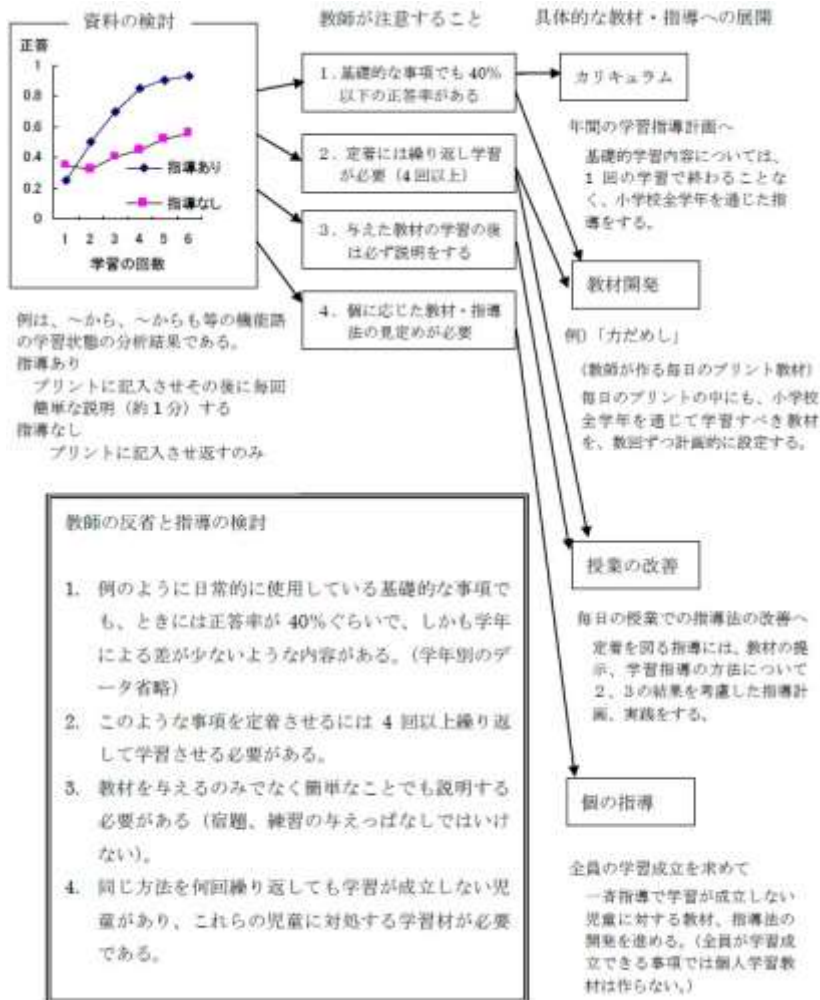
(2) 教育リソース DA の個人学習法での利用

(3) OECD の個別学習の自動化での課題コースでの教育リソース DA 利用

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用

8-2. 教育実践研究資料の活用

(1) 教育リソース DA の教育実践資料を用いたくり返し学習 【くり返し学習の指導方法の検討】



提供資料（教育リソース・デジタルアーカイブより）

図8-2 くり返し学習と学習指導

井口先生は、この資料を参考にし、A小学校で学習指導力、学力の向上の実践研究を教頭として展開され、次のような成果を得られた。

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用

8―3. 個別学習での教育リソースの利活用

(1) 学習者が自分の学びに適した教材を選び利用

参考資料を見て検討

(池田小の自学習材、ホップ、ステップ、ジャンプでの教育リソースの利用)

(2) 教育リソース DA を利用した個に適した学習材の提供

(3) 高等学校での個に適した学習プリントの提供

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用

(4) 教材データベース、学習履歴ファイルを用いた個別学習材の提供（選択）（1980年代）

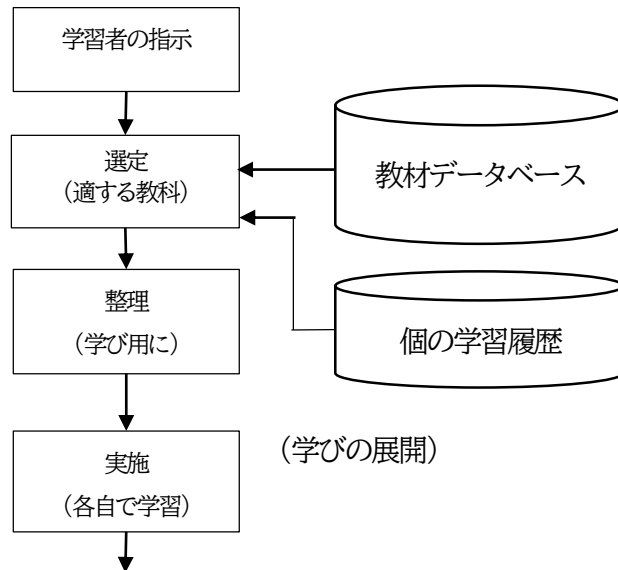


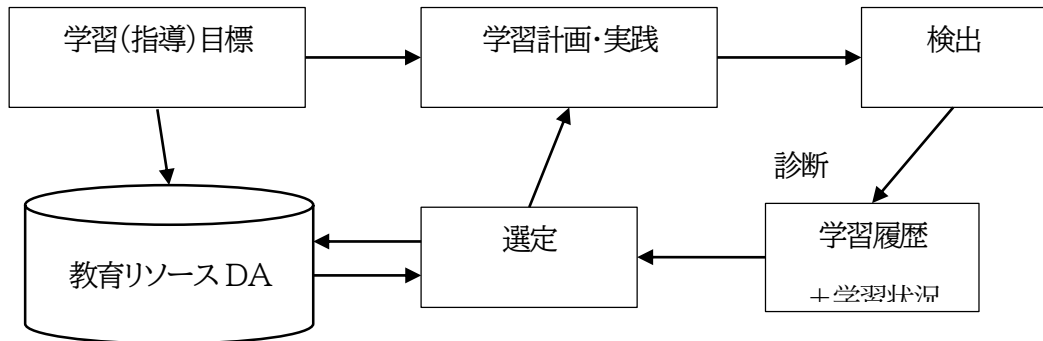
図8-3

(5) 教材データベースを用いた CAI 学習
(参考資料参照)

(6) 学習プログラムブックの作成と利活用
(参考資料参照)

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用

(7) OECD の個別学習の自動化（レベル1 以上）と教育リソースの関係
個に応じた柔軟な学びのコースの開発と利用



教育リソース DA はどのように用いられるか。
(個別学習の講座を参考にして検討)

図8-4

8—4. 教育リソースの学習指導計画、授業分析での利活用
～各自の経験や参考資料で検討～

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用

8—5. 学びでの情報(教育リソース・デジタルアーカイブ)の利用について

～DIKWモデルの観点から～

～先生方は、情報をどのように利用されているか～

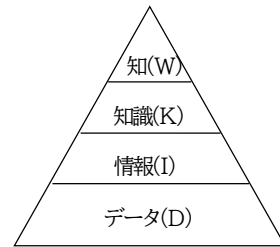


図8-5 DIKWモデル

～データ、情報、知識、知恵の関係を検討せよ～

[巻末資料]

8—6. 修学旅行での教育リソース・デジタルアーカイブの利用

～観光情報としての利活用～

修学旅行等の案内の情報

～教育リソースを用いた沖縄おうらい(修学旅行用)について～

一般に観光情報としての案内は、写真に簡単な紹介がされている場合が多い。修学旅行としての案内情報としてさらに充実させるべきである。

このため、「沖縄おうらい(修学旅行用)」の案内情報では、主要な資料には、写真、動画、さらにこれを結びつける解説、歴史的な背景、各地域との関係等をオーラルヒストリーとして記録、提供し、学びの観点からの充実がなされている。すなわち、高校生が各自の必要に応じて修学旅行で課題をもって行動できる資料として構成した。

(1) 沖縄おうらいの構成

沖縄おうらいは、次のような項目で構成されている。

表8-1 「沖縄おうらい」 インデックス・コンテンツ等一覧

カテゴリー	コンテンツとオーラルヒストリー、コラム
1. 沖縄の観光	沖縄美ら海水族館／国際通り／道の駅かでな／玉泉洞／アメリカンビレッジ／海中道路
2. 平和への願い	平和祈念公園／ひめゆりの塔・ひめゆり平和祈念資料館／旧海軍司令部壕
3. 沖縄の世界遺産	今帰仁城跡／座喜味城跡／勝連城跡／中城城跡／首里城跡／園比屋武御嶽石門／玉陵／識名園／斎場御嶽
4. 沖縄の生活文化	衣：芭蕉布／花織／琉球絣／ミンサー／紅型 食：料理／食材／果物／果物／レシピ 住：琉球村／中村家住宅
5. 沖縄の自然	万座毛／古宇利島／伊江島／ガンガラーの谷／辺戸岬／大石林山／八重山諸島
6. 沖縄の伝統文化	琉球舞踊／組踊／エイサー／獅子舞／琉球音楽／わらべ歌／沖縄空手／講演「沖縄の組踊」
7. 沖縄の産業	焼物(やちむん)／琉球漆器／琉球ガラス／三線／織物／農業／水産業
8. 沖縄の離島	川平湾／唐人墓／アンガマ／竹富島伝統的建造物群保存地区／離島をつなぐ橋／人頭税石(賦測石)
オーラルヒストリー	●戦中戦後の子どもからの視点オーラルヒストリー ●講演「首里城の復元と沖縄の文化」 ●沖縄エイサーの歴史オーラルヒストリー
コラム	●コラム「王女 百度踏揚」 ●コラム「沖縄の3大!?調理方法」 ●コラム「カー」 ●コラム「琉球張子」 ●コラム「しまくとぅば」

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用

	●コラム「沖縄県の県花デイゴ」 ●コラム「サトウキビ」 ●コラム「月桃」 ●コラム「ハーリー」 ●コラム「サトウキビ」
--	---

表8-2 「沖縄おうらい」資料分類と学修ポイント・紹介

カテゴリー	学修のポイント・紹介
1. 沖縄の観光	沖縄の産業の約8割が観光産業をふくむ第3次産業です。沖縄の美しい自然や独特の文化を求めて訪れる観光客は、本土復帰した1972年には50万人弱でしたが、令和元年では1,016万3,900人(令和2年1月発表 沖縄県入域観光客統計概況より)と年々増加し、過去最高を更新しています。観光は沖縄県の暮らしを支えているといえます。
2. 平和への願い	沖縄は日本で唯一の地上戦が行われた地です。この地上戦により、子どもやお年寄りを含み、多くの住民たちが犠牲となりました。沖縄県では6月23日を「慰霊の日」とし、戦争で亡くなった外国人を含むすべての人の冥福と世界平和を願い、沖縄各地で「慰霊祭」を行います。戦争体験者が少なくなる中、現在でも沖縄各地で不発弾が発見されています。
3. 沖縄の世界遺産	沖縄にあるグスク(城)および遺構から、5つのグスク(首里城跡、中城城跡、座喜味城跡、勝連城跡、今帰仁城跡)と、その関連遺産の4つの遺物(園比屋武御嶽石門、玉陵、識名園、斎場御嶽)が2000年の第24回世界遺産委員会会議で世界遺産に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」(公式名称)として登録されました。
4. 沖縄の生活文化	沖縄の暮らしは、亜熱帯の気候風土や琉球王国時代の歴史文化に深く根差しています。暮らしの基本である「衣食住」には、医食同源の沖縄料理の伝統工芸の技法、各地域のさまざまな伝統芸能や風習、伝統行事と深く結びついており、長寿に快適に暮らすための生きる知恵がつまっています。
5. 沖縄の自然	沖縄は高温多湿の亜熱帯で、真冬を除く年間3分の2でクーラーが使用されています。このような気候が多様な自然環境をつくり出し、独特の動植物の生態系を育んでいます。沖縄本島北部の山原は生物の宝庫、八重山(諸島)は東洋のガラパゴスといわれています。破壊された自然をもとどおりにするためには、大変な時間がかかります。大切に守り、未来に伝えていきましょう。
6. 沖縄の伝統文化	沖縄の伝統文化は、14世紀末から16世紀にかけて、琉球王国時代に日本と朝鮮、および東南アジア諸国との中継貿易、中国との進貢貿易により繁栄しました。そして海のシルクロードとして様々な文化が混ざり合い、独自の文化へと発展してきました。これらの伝統文化の歴

	史的背景を探り、沖縄の伝統文化の理解に努めましょう。
7. 沖縄の産業	沖縄の産業はサービス業を中心とする第3次産業の比重が高く、中でも観光産業が急速に伸びています。琉球王国は「アジアの架け橋」として航海技術をもちいた海外貿易により発展し、多様な異文化が導入。それらは年月をかけて沖縄の風土に根付き、その技術や芸術性は沖縄の文化だけでなく、沖縄の産業の礎にもなっています。
8. 沖縄の離島	沖縄県は有人島 49 島、無人島 111 島、計 160 島もの島々からなっています。沖縄本島も沖縄島とよばれ、周辺の島々と併せて沖縄諸島とよびます。石垣島や竹富島は八重山諸島に、宮古島は宮古諸島に属しています。これらの2つを併せて先島諸島と呼びます。石垣島や竹富島（八重山諸島）、宮古島などは観光リゾート地として注目を集めています。

(2) オーラルヒストリーと関連資料

～学びの深みを入れる情報の提供と活用～

オーラルヒストリーとデジタルアーカイブ

デジタルアーカイブは、1つの事象に対して多様な資料や関連資料を収集している。

各資料データにはそれぞれメタデータが付与されていて、その内容を把握することができる。なかにはメタデータに関連資料情報を記している場合もあるが、多様に派生した資料データの関係性の全体を把握することは困難である。

オーラルヒストリーは、話者の文脈をもった語りや話からデジタルアーカイブ内の複数の資料データの関係性を把握することができ、いわば「デジタルアーカイブ全体のメタデータ」とであると捉えることができる。

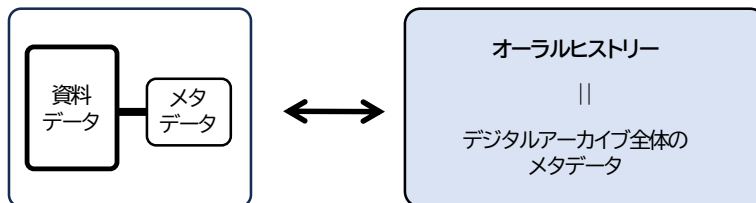


図8-6 オーラルヒストリーとデジタルアーカイブ

たとえば、首里城を構成する各資料データの内容はメタデータに記録されているが、首里城全体の内容や多様な関連資料データ間の関係性については、首里城に関するオーラルヒストリーの視聴によって理解することができる。

このようにデジタルアーカイブにおいて、オーラルヒストリーは次のように利活用できる。

- 口承による歴史の記録
- 当事者の証言の記録
- 収集した資料データ全体の明らかにするという意味でのメタデータ

エイサーのオーラルヒストリー（宜保榮治郎氏）関連映像

沖縄のエイサーの歴史として、宜保氏は、エイサーの現状、歴史的変化、さらに 1600 年頃のいわき市から来られた袋中上人の話「おもろ」についての関係などをオーラルヒストリーとして紹介されている。この広い観点での話と合わせて、関係写真を提供している。

3

Archives
ウェブサイトへ



エイサー

えいさー

お盆の時期に現世に戻ってくる祖先の霊を送迎するために踊られる伝統芸能。主に、旗頭、太鼓、手踊、チヨンダラー、地謡で構成され、若者たちが踊りながら地区の道を練り歩く。約400年前に塩島県いわき市出身の袋中上人が伝えた盆仏踊りが沖縄のエイサーの源流といわれる。




1 宜野湾市青年エイサー 2 袋中寺(沖縄県那覇市) 3 じゃんがら盆仏踊り(塩島県いわき市)

6

沖縄の伝統文化

Oral History ④

「沖縄エイサーの歴史」 オーラルヒストリー 宜保榮治郎氏

「盆をはいらいするのれきし」 2011年11月25日 収録(はいらい)

内容紹介

Archives
ウェブサイトへ





結局沖縄も盆踊りですね。エイサーが満載するぐらい昔から盛んなんですね。ですけども、このエイサーがどういう意味を持っているのか、あるいは目的、そういうふうなものは盆行事として伝承されていくような解釈があるわけですね。このエイサーの目的というのは五穀豊穡のために踊られるんだというふうなことでやっておりまして、やっぱり庶民の言葉で言いますと、何でも五穀豊穡、子孫繁栄と言ってしまうすべての目的はそれに集約されるわけですから、そういうことで、沖縄でもエイサーは五穀豊穡だということを言っているわけですけども、しかし、なぜ盆という仏教の行事のときにやるのかということがあまり研究されていないわけですね。

—オーラルヒストリーより（一部抜粋）—



平野屋青年エイサーの夕べ

図8-7 「沖縄おうらい」の事前学習を意識した構成

宜保榮次郎氏によるエイサーについてのオーラルヒストリー(一部)

(略) 沖縄の文献をずうっと調べてみると、袋中上人が1603年ですか、沖縄に来られて浄土宗を広められたと。そして、今度行かれた方がいいと思いますが、桂林寺跡というのが商業高校の裏側の方にありまして、この袋中上人が沖縄に来られて浄土宗を広められたと。そして、そのときにお経を庶民にわかりやすく沖縄の言葉に訳して教えたということが、はっきり『球陽』という本とか『琉球国由来記』という本に出ているんですね。そういうことがはっきりしているのに、まだ盆踊りというものは本当に袋中上人が持ってきたかどうかわからないというふうになっていたんですね。そして、お盆の季節になると、新聞が、各村々でエイサーが行われていると、それは全部五穀豊穡を目的とした行事であるというふうなことを言っていたんですね。

そういうことでやりましたら、外間守善先生が、本土の方の第一書房だったかどこかと提携しまして、その沖縄の歌を全部拾い集めると、これまでのものを。そういうことがありましたから、私は、じゃあこのエイサーのもと歌がどこに残っていないかということで、ここの南部島尻あたりに調査し始めたんですね。これが見事な形で残っているんですよ。そして、私は、この一つの村を採集するのに2日も3日もかかりますから、それをずうっと追跡して行って、私は5つばかりですかなあ、「仲順流れ」の歌をずうっと集めていったんですね。そしてそれを外間先生の方に送りましたら、先生もびっくりしておられたんですね。というのは、外間先生自体が、もうすべて沖縄の歌謡のもとは『おもろさうし』であるというふうに思い込んでおられるんですね。そして、今度は先生が、エイサーはおもろから発生してきたんだとおっしゃるのは、「エイサーおもろ」というのがおもろの中にありましてね、そして先生は、この「エイサーおもろ」からエイサーは発展してきたんだという説をずっと持っておられますけれども、私は、そうじゃなくて、こういうふうに「盂蘭盆経」という中国のお経が日本に渡ってきて、そしてそれが浄土宗のお坊さんの方で勉強なされて、袋中上人は沖縄に来られて、お盆のときにこういう芸能をやりなさいと。そしてそのときに、親の供養は大切であると、あるいは亡くなった人の供養は大切であるということを、この「仲順流れ」というお経で教えられたというふうにして話しましたら、次第に近ごろは新聞の方も、エイサーは念仏踊りであると、そしてお盆の目的は供養であるというふうなことで、ようやく私が説明したことがあるわけですね。だから、私が第一発見者というわけじゃないんですね。山内盛彬という大正のころの有名な沖縄の学者、あの人がもう触れておられまして。

(略)

「宜保榮次郎氏『エイサー オーラルヒストリー』より

(撮影日：2005年12月24日)



図8-8 エイサーのお話をされる宜保榮次郎先生

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用



図8-9 宜野湾市青年エイサー祭り 小太鼓と踊り手



図8-10 道ジュネー



図8-11 じゃんがら念仏踊り 鉦（しょう）いわき市



図8-12 じゃんがら念仏踊り 太鼓 いわき市



図8-13 能満寺 境内の碑 袋中上人生誕地



図8-14 いわき市 菩提院 境内の様子

(沖縄のエイサーといわき市の念仏踊り)

首里城の歴史と沖縄の文化 高良倉吉氏
(戦後の復元について)

Lectures ①

講演「首里城の復元と沖縄の文化」高良倉吉氏（琉球大学）

こうらん「しゅりやうのふくわんとおきなわのぶんか」 たからくらよしし「りゅうきやうだいぎく」

内容紹介

Archives
ウェブサイトへ





まさに東アジアと東南アジアという
近い世界を駆け回ったといいますが、
行き来した琉球王国の人たちです
けれども、いったい誰がそういう交
流活動を描いていたのかと。つまり、
その活動、事業の一番中心的存在
は誰なのかということ。

これは琉球王国の問題に絡むのですが、結論から言うと、
実はそれは首里城に君臨する王だった。王様がアジアとの交流事
業の経営責任者、事業主体だったことが、さまざまな資料を使っ
て明らかにできます。

そうすると、東南アジアに行った船は、要するに王が持つ船、公
的な船。船に乗っていく人々たち、スタッフたちも、王の家来だっ
たというわけです。それを証明するさまざまな資料が残っていま
す。

ですから、首里城というものは、琉球の島々を支配する政治・行
政的な拠点であっただけでなく、アジアとの交流事業の総本部と
いうか、ヘッドクォーターとして機能していたということが明らか
になるわけです。

—講演内容より（一部抜粋）—
※講演の録音・文書化がされています。

3

沖縄の世界遺産



1 首里城正殿大礎柱（複製）



2 首里城内 京の内



3 西の阿座ナから見た首里城正殿

図8-15 「沖縄おうらい」冊子内の首里城の関わるオーラルヒストリー

また、「沖縄おうらい」の各コンテンツは沖縄県の代表的な事例ばかりであるが、修学旅行内で行くことができなかった場合も、沖縄を知る上で一度は実際に観光・体験したり、知ってほしい歴史や文化、場所である。

卒業後にも、沖縄への観光のリピーターとなり、沖縄を訪れる計画に入れてほしい場所ばかりである。



図8-16 首里城正殿



図8-17 首里城正殿 正殿正面の唐破風飾



図8-18 首里城正殿 正殿内部 二階御差床正面



図8-19 首里城正殿 夜のライトアップ

高良倉吉氏による首里城再建についての特別講演会(一部)

(略) 結果としては、地上にある首里城が跡形もなく、完膚なきまでに破壊されたという状況であったわけです。

その戦争が終わって、皆さんご存じのように沖縄はアメリカ軍に占領されて、47 都道府県から沖縄県のみを分割して、アメリカの直接統治、支配という体制に置かれます。アメリカは冷戦がやがて始まりますので、世界に大きな軍事拠点を建設する必要があったわけですが、それに適していたのが沖縄だったわけですから、使い勝手がいいように日本の施政権から分離して、アメリカが直接に沖縄を支配するという体制が誕生します。まさに基地建設のために、あるいは軍事的な、戦略的な目的のために、沖縄県の島々を利用するというか、活用するということになりました。

そのアメリカ統治の中で、私が勤めております琉球大学という大学が、1950 年、終戦の5 年後に首里城の跡に建設される。キャンパスになっていくのですね。そこでさまざまな人材が育っていくわけでありますけれども、やがて沖縄の人たちはアメリカ統治の中から、自分たちの祖国は日本だという声が高まって、日本に復帰しなければならないという運動が高まり、やがてアメリカ統治時代が終わります。しかし、基地を残したままで沖縄が日本に返還されるという、これが1972 (昭和47) 年のことです。

そのことによって琉球大学が国立大学になりまして、キャンパスが狭いというので、首里城の跡に置かれたキャンパスから、現在の新しいキャンパスを求めて移転することになり、琉球大学が移った後に、その場所をどのように使いますかという跡地利用検討というものが始まっていて、実は私はそのときから深くかかわったというわけです。

検討委員会が何度も開かれましたけれども、結論は、首里城の建物の復元を含む歴史公園として整備したらいいじゃないかというようなことに決まりました。誰が考えて



図8-20 首里城のお話をされる高良倉吉先生

も、結論はそうにしかならないわけですね。

問題になったのは、では、いったい誰がその事業を中心になってやるのかと。お金にして何百億円。当然、200 億円とか 500 億円というお金が必要になってくる。あるいは、もっと必要かもしれません。それをどうするかという、ちょっと難しい問題はたくさんあったのですが、何とかクリアしまして、一応首里城の建物の復元を含む歴史公園として、首里城復元プロジェクトを進めていこうという結論に達しまして、それ以降、本格的な首里城の復元作業が始まっていくという流れになります。

まず、どのレベルで首里城を復元するのかということが当然問題になります。一番手っ取り早い方法は、アメリカ軍に破壊される前、戦争の前の首里城を復元すればいいじゃないかと。写真もたくさんあります。アメリカ軍が空から撮った写真もあります。それから、戦争で破壊される前の首里城で遊んだとか、見学したという、首里城をたくさん覚えていらっしゃる方もいるわけですから、そういう点でいけば、戦争で破壊される前の首里城を復元するのが一番楽なのですが、われわれはあえてそのことを目的にしなかった。

当時、われわれは酔っぱらうといつも言っていたのですが、われわれがやろうとしているのは中古車を復元するのではないと。ぴかぴかの新車を復元しようと。つまり、首里城に王がいて、家来がいて、アジアとの交流の拠点になっていて、島々を支配する体制が息づいていたころ。つまり首里城が生きて呼吸している、現役であった、それをわれわれは新車と言い、その新車を復元するんだというように、われわれはよく言ったのですが、目標をそうしました。往時の首里城を復元するということです。

そうすると、これは言うのは簡単ですが、誰も見たことがないわけです。何しろアメリカ軍が破壊する前の首里城というのは、王様が明治 12 年に首里城から出まして、軍隊の駐屯所になって、やがて学校に使われたりして、解体修理があつてというように、実は元首里城、首里城跡というのが、その後続いただけの話です。それを明治 12 年の春、琉球王国がなくなる以前の状態に戻そうという、とんでもないテーマを掲げたわけですから、それがいかに困難であるかということは当然予想されたわけですが、それはたぶんわれわれの責任だろうと。ハードルを一番高くしておいて事業をしたほうが、はるかに多くのことが深められるのではないかという思いです。

具体的には、それは二つのことを意味する。まず、首里城に関する本格的な研究を始めてみようということになります。首里城を研究しなければ、まさに首里城を解剖しなければ復元はできない。当然、そういうことを意味するわけですね。

そのためには、二つ目は何かというと、徹底した資料収集をしようと。それは、先ほどのアメリカ軍が撮った空撮の写真から、戦前の古写真は当然です。発掘調査をして地下に埋まっている情報を採る、それも当然です。琉球王国時代の首里城に関するさまざまな資料を、徹底的に収集して分析する。(略)

「高良倉吉氏『特別講演 首里城の復元と沖縄の文化』より
(撮影日：2005 年 11 月 21 日)

(加治工尚子、加藤真由美)

[巻末資料]

8—7.【参考】A 小学校の教育実践の成果

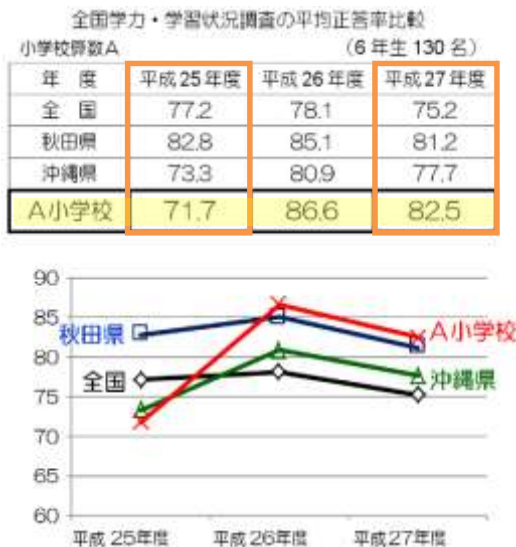


図 A 小学校の教育実践の結果
全国学力・学習状況調査の平均正答率の比較

教育実践についてのシンポジウムより

[A 小学校の教育実践]

A-1.実践研究をはじめる前の学校の状況

(1)A 小学校の状況～沖縄県の平均点よりもさらに低かった～

【井 口】沖縄県の A 小学校に教頭として赴任したときの状況を簡単に説明します。

学校規模は児童の在籍数が 800 名前後のかなり人数の多い学校でした。そのときの先生方の状況といいますのは、全国学力・学習状況調査の結果を受けて、日々の授業を改善していかないといけないという危機意識をもっていました。当時(2013 年)の沖縄は全国最下位であって、その当時勤めていた学校は、さらにその平均点よりも下で、なんとかこの状況を打開したいという状況でした。



A 小学校教頭 井口 憲治先生（当時）

先生方はそういう状況の中で何とか成果を出したいと思っていたんですけれども…。(自分は)そのような状況が続いている学校に赴任いたしました。

児童の学習の状況ですが、先生方から聞いたときの記憶をさかのぼりますと、単元テストというのがありまして、一つ一つの単元が終わったときに成績をつけるためのテストを行うんですが、そのテストではそこそ点数はとれている。しかし、全国学テであるとか、あるいは沖縄県の学力調査であるとか、全国の東京書籍版の標準学力調査なんかになると

成果が出ない。ですから、“学んだ後の定着までの手だてに課題があるはずだ”という見通しは持っていました。

そういう状況の中で、岐阜女子大学大学院で学んだことを実践研究として進めていくことになったんですけれども、そのときの学校の児童の生活態度、学習態度も“非常に落ち着かない児童が全体的には多かった”感じがいたします。

ただ、校長先生を筆頭に学習規律を徹底しようということを掲げて推進していたようで、全職員「学習規律を徹底するんだ」という取り組みは非常にできていた感じがいたしました。そういう状況でスタートしていききました。

自分が赴任したとき、4カ月前に実施された標準学力調査の結果を見せてもらいましたが、“ことごとく全国より下”でした。

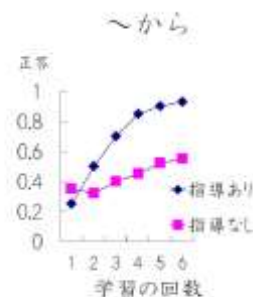
それから、赴任して間もない時期に行われた全国学テの結果では、算数 A の全国平均が 77.2 点、沖縄県が最下位で 73.3 点、本校は 71.7 点。B問題についても全国が 58.4 点、沖縄県が 54.4 点で最下位、本校はさらにその下でした。

(2)A 小学校の児童の学習課題

【井 口】まず、大学院でたくさんのことを学んだのですが、その中で自分が特に印象深く聞かせていただいたことの中に“言語の繰り返し学習”というのがあります。児童が非常に理解しにくい「～から〇〇まで」を正しく理解するためには、どのように繰り返し学習を行っていくとよいのかについて講義を受けたことを鮮明に覚えております。

「～から〇〇まで」という問題を解くのですが、1 回目は(指導あり・なしのどちらも)正答率が40%前後なんですけれども、間違えに対する指導なしで、2回、3回目、4回目、5回目、6回目と繰り返し学習を続けていきます。すると、最終的には「指導なし」だと、正解率が60%ぐらいまでしか上がってないんですね。

一方、これを1回テストした後、担任で間違えに対して短い指導を入れて、もう一度テスト



簡単な操作言語(～から)の正答率と指導の方法

をする。そして、間違えに対してまた短い指導を入れてもう一度テストをするということを繰り返していきますと、大体4、5回ぐらいで9割の正答率まで上がっていくんです。このデータを見て、“こういう視点で繰り返し学習をやったことがなかったな”ということで、非常に衝撃を受けたのを今でも覚えています。

それまでの指導方法といたら、単元が終わった後、あるテストが近づいてくると学年主任がたくさんプリントを準備されまして、「このプリントをテストの日までにやろうね」と言って、ただひたすら解いていくんです。でもこのやり方は、自分が採用試験を受けるときは絶対やらないやり方なんですね。“ただ1回だけ解いてもう終わり”というのは。

だから、非常に取り組み方に問題があるなと思っていたなかでの“このデータ“だったので、この視点でもう一度復習を考え直してみる必要があると思いました。

ただ、当時勤めていた学校で、この考えをもとに約800名全員に実践していくとなると、“問題づくり”とか“実践方法等”も含めて考えないといけなかったんです。特に算数が本校の課題で、校長を中心に算数にかなり力を入れており、さらにそれを定着させていくというところが非常に課題でした。そこで、単に“記憶を問う問題ではなくて、理解していないと解けない問題を学年ごとに教頭がつくらせていただきまして、それを毎週1回行い、「4回の繰り返し学習をして欲しい」ということを先生方に提案“しました。

A-2.先生方や保護者の状況

(1)先生方や学校の状況と学習指導の取り組み

① 多忙な先生方

【井 口】どこの学校でもそうかもしれないんですけど、先生方は非常に多忙で、“新しい取り組みを提案したときには、大体いい印象は持たないんです”。繰り返し学習について大学院で学んだ後、先生方にこのデータを見せました。そして“1回プリントをしたら終わりではなく、丸つけをした後に必ず簡単な指導を入れ、それを5回ぐらい繰り返すことで初めて力について定着していくんだ”と説明をしました。しかし、“こんなに忙しい中でできるのか”と先生方は非常に心配していました。

②先生方のやる気に反比例して、子どもは意気消沈

もう一つ学校でよくない現象というか…。先生方は非常に熱心で、放課後に子どもを残して、できない子に特訓するというようなことをやっていた先生もいて…。でも、これはできない子にとってはかなり苦痛で、結構先生がやる気があると長引くので、“先生のやる気に反比例するような形で子どもは意気消沈”していくんですね。これも何とか打開しないといけないと思いました。そこで、先生方に一つの提案として、“できていてもできていなくても、個別指導をする時間は1日 15 分以内と決めてもらえませんか”と伝えました。放課後にいろんな取り組みをすると、どうしてもエンドレスで先生方はやってしまうので、“昼の休み時間が終わった後、日課表に 15 分だけ復習の時間”というのをつくるので、その中で復習をして、できていない子は長い目でこつこつ育てていくというようにやってもらえませんか”と。

そうしたら先生方から“本当にそれでいいんですか”と質問があったのですが、「はいそれ

でいいです」と進めていきました。そうやって妥協して進めていったのを覚えております。

【井 口】（実践を始めた当初の子どもたちの様子は）さきほども少し話したのですが、当時は非常に子どもたちの人数も多くて、1学年で大体140、50人はいますので、非常に騒がしいというか、落ち着かない子が多かったですね。

しかし、自分が赴任する1年前から校長先生の方針で、“まずは学習を支える規律をしっかりしないと授業というのは成立しない”ということで、1年かけて学習規律を一生懸命頑張ったそうです。そのおかげで何とか各学年、授業はできるまでは少し改善されましたが、まだ成果は出ていないという状況でした。

（2）保護者や児童の状況

【井 口】 保護者と児童については、学校の方針にそんなに反対する方はいらっしゃらないような地域で、学校側がきちんと方針を示してくれれば、それをちゃんとやってほしいという感じの、割と“受身的な地域柄”ではあったかとは思いますが。保護者と児童については、当初からあまり心配していませんでした。たぶん学校側がきちんと説明をして、「こんな取り組みをします」と言えば、問題なくいくと思っていました。

“一番心配したのは先生方”です。何せ、先生方がみんな動いてくれないと、にっちもさっちもいかないので…。そこをどうするかが最初の山場だったんです。

当初は誤解する先生もかなりいて、なぜか、“「この繰り返し学習のデータで自分たちは評価されるんだ」”“「教員の評価につながるんだ」”みたいな誤解を持った方もいて、「それは全く違いますよ」という話もありました。

また、“「机上の勉強ばかりで、心の教育をないがしろにしている」”という意見を言った先生もいましたが、「それも違いますよ」と。

“「学力というのは、心の成長も含めて、体力も含めてトータルで学力なので、私たちはそれだけを頑張るとは言っていませんよ」”と説得して、共通理解を大事にしながら進めていきました。

A-3.先生方への援助や手立て

児童の個を見る力

【井 口】 まず先生方と共通理解したのは、「1年生から6年生までの復習プリントは自分のほうで作成しますよ」ということです。

これは1年生の復習プリントですが、おもて面は“理解をしていないと解けない問題”を9点で作成しまして、うら面は“計算力向上、日ごろからきちんと家庭学習していないと解けない問題”を配列しました。これを各学級でテストした後に自分が採点をしまして、データ処理をして先生方にお返します。

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用

その後、特に落ちろについては、さらに備したり、またこのプリントして…。せめて次は5回ぐらいは繰り返しました。ただし、ただばいいわけではなく1回終わっては先生で、そして間違えに対して、また次のプリント個別指導をするといった。



作成した学習プリント(井口先生)

込みがあるところ補充プリントをプリントを再度させるプリントまでに返し解いていき5回連続で解けて、5回解く中で、方で丸つけをしする個別指導をトを解いて、またうように進めまし

間違えに対する個別指導ですが、各学級で昼の休み時間の後の15分の復習タイムのときや、朝の時間等に丁寧に個別指導をしました。このときに先生方と共通理解したのは、「子どもがどこでどんなミスをしているのかを短い時間でぱっと把握をして、温かい言葉をかけてほしい」と。

「よく頑張っているね」

「最近家庭学習もやっているね」

という、短いコミュニケーションも大事にして、“全員と毎日かわること”を丁寧に続けていったんです。

これが全学級で取り組んでいる様子です。黒板の横にちょっとした台があったので、そこで間違っているプリントに対して丁寧に指導するということをしていきました。



全学級で取り組んでいる様子(井口先生)

子どもたちのデータを各担任にフィードバック

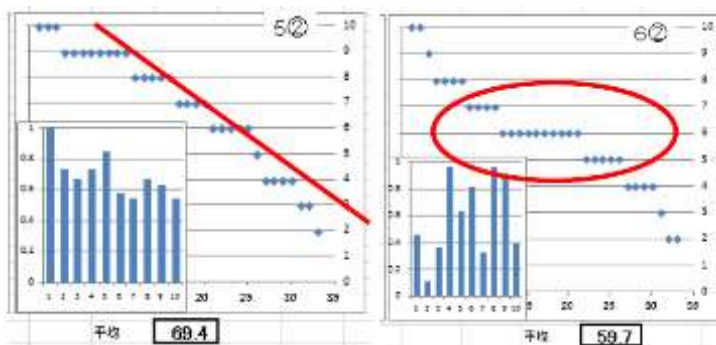
自分が先生方に見せたデータというのは、ちょっと地味な作業ではあるんですけど、各学級

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用

の1つずつのデータをドットと棒グラフであらわしまして、設問ごとに正答率がどうだったのかを先生方にフィードバックしました。例えば、
「1番は1のところまで棒が行っていますので全問正解でした」
「2番、3番は学級で7割、8割ぐらいしかできていませんでした」
というデータです。それともう一つは、誰が何点とったのかがわかるように、ドットであらわしました。



各担任にフィードバックした子どもたちのデータ
設問別や点数ごとの人数がわかるようになっている(井口先生)



ドットの右端が直線状(左)、中間に集中(右)
学級で全体的に正答率が低いので、ペアによる間違い直しでは解決できなかったり、
解決に時間がかかってしまうため、一斉指導が必要(井口先生)

各学級のドットを見ると、復習が順調に機能しているところは満点をとっている子がかなりいるんですね。ドットが下のところにある子については、「とにかく慌てないでゆっくり育てていこうね」と声掛けしました。このスタンスが子どもとの非常によいコミュニケーションにつながってよかったと思っています。

A-4. まず先生が変わった

授業改善と徹底した復習の両輪(井口先生)

① 定着するまでこつこつやることの大切さを実感

【井 口】先生方に出てきた変化ですが、今まで単元の復習だけに集中していたというか、単元のテストができるようになるための復習に特化した形の宿題が恒例のように行われてきたんですけど、自分から提案したように“全ての単元から少しずつ抽出した問題を使って進めたこと”で、「できるまで丁寧に継続していくということがすごく大事だとわかる、実感する場面が多々あります」と先生方から聞いています。

特に小学校5年の割合の単元は一番の難関で、理解しにくいところなんですけど、この取り組みをした先生の中から、「こんなにやりやすい割合の授業は今までで初めてだ」という声を直接聞きました。「やっぱり定着するまでこつこつやって、難しい単元を迎えることはすごく大事ですね」という。「今までは、割合の勉強をしたいのに、そうじゃない小数の割り算の復習をしないといけなくなったり、もうそこから脱線した復習をしないといけない間に単元が終わってしまうということが多々あったんですけど、それがなかったんですよ」という声です。

② 中学校に行ってもすごく伸びていますよ

それから、もう一つは、自分たちは次の学年の先生に迷惑をかけないようにして送り出そうということを書いてきたんですけど…。ある日、たまたま中学校の学力向上担当の先生と話をする機会があって、「中学校ですごく伸びているんですよ」という声を聞いて非常にうれしくて。その先生に見せてもらったデータがありまして、今までこういうデータは見たことがないということが起こっていたんです。

それは何だったかといいますと、「中学校に進学すると大体は小学校で力がついていても、学力がぐっと下がってしまう。ところが、中学校で行った標準学力調査で、全国の平均点が71.3点に対して、(本校は)73.7点あった。全国を超える学年を初めて見た」と言い出して…。あと「活用問題のところも、全国の62.4点に対して、(本校は)64.8点あった」「中学校に行ってもすごく伸びていますよ」と聞きまして、こういう復習の仕方というのはすごく大事なんだなと。

先生方からも、授業改善はこまめに校長先生を中心にやってきたけれども、それプラス“指導ありの繰り返し学習と両輪で進めていけば、ちゃんと学力向上できるんですね”という声が頻繁に聞かれるようになりました。

A-5. 具体的な進め方

2年目でも安定(井口先生)

① 繰り返し学習のサイクル

【井 口】それでは、どのような実践をしたかですが、週に1回、A4・両面1枚のプリントを作成

しまして、それをテストして採点後にデータ処理をして、その結果を担当に渡します。その後、担任は、そのプリントを毎日宿題で持たせたり、復習タイムで問題を解いたりしながら、間違いに対しては丁寧に個別指導をしたりというかわりを続けていきました。このサイクルを1週間サイクルで、取り組みました。ただ、最初の年は1週間サイクルだったんですけど、2年目は漢字の定着も目指したため、2週間サイクルに変えて、これを継続しました。

②気になる児童への対応

気になる児童については、先ほども触れましたけれども、とにかく慌てないこと。気になる児童の子ほどゆっくり時間をかけて長いスパンで丁寧に指導していくんですけど、“1日の指導は15分を限度としてそれ以上はやらない”ということで進めました。

③常に職員と一緒に考える

先生方に信頼してもらえるようになるためにも、気になる子に対する対応を常に一緒に考えていたことが、自分が行った学力向上の取り組みと、あと一つの大きな柱だったと思っています。常に職員と一緒に考える、…「管理職なので担任に任せる」ではなくて、気になる子のお母さんには「たぶん何かあると思うから検査を受けてみては」という話は、“けっこう担任からは言いにくいんですね”。保護者との関係が悪くなった場合に、担任が「あの先生にこんなことを言われた」というふうに保護者からの信頼をなくしてしまったら困るんです。そこで自分は教頭なので、私から常に言うようにはしていました。「お母さん、お子さんはこうこういう特徴があって、こんな対応があるよ」というように、話をしたり…。「仮に保護者がそっぽを向いても、これで担任との関係は悪くならないからいいや」と思って、よく授業参観のときに、「お母さんちょっと来て」とかいう感じで声をかけていました。授業参観をずっとずっと回って、1人ずつ対応していく。そういったことをしていきました。

成果が見え出したのは、授業参観をしまして、先生方の授業が変わってきて、そして2学期、年の末あたりからです。先生方の授業が変わってきたし、子どもたちの顔が変わってきたなどというふうに感じました。

A-6. 苦労したこと、成果

(1) 慣れないうちは大変(井口先生)

① 学習プリントづくりとデータ分析

【井 口】 実は、教頭職というのもあったと思うんですけど、いろいろな仕事が多岐にわたっていて…。プリントをつくりたいと思ったときに保護者対応の事案が出てきて、中断されることがよくありました。それで、週末こっそり学校に来て、こつこつつくったりとか、そういうことがたびたびありまして…。予定外の時間でプリントづくりをしたことが何度もありました。これが非常に見通しが持たなくて大変ではあったんですけど、ただ、自分も教材づくりは非常に好きだったので、自分としてはつくるのは苦ではなかったです。あと、テスト結果のデータ処理するのに最初は慣れていなくて時間がかかったんですけど、それも繰り返し繰り返しやっている

うちに時間が大分短縮されて、できるようになりました。

②問題の精選

問題をつくるときにかかるのが、大体1つの問題で30分程度、前回実施したデータと照らし合わせてこの問題を変えようとか。ですので、1学年で30分として、6学年分なので3時間ぐらいいは使う、という見通しでやるといいのかなと思っています。

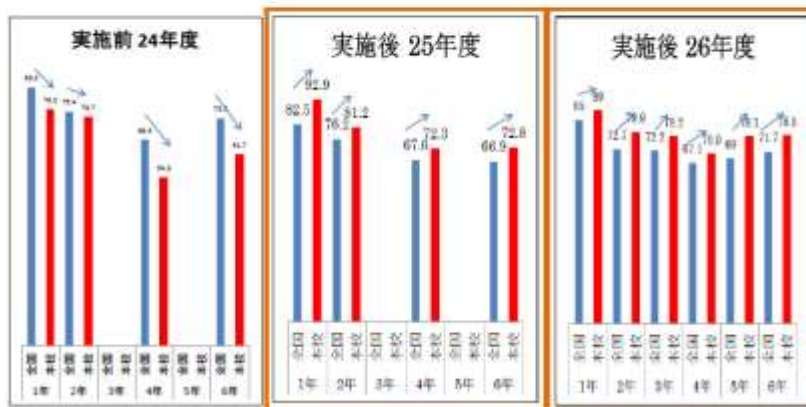
③3か月半で成果があがる

いつごろから成果が見え出したかなんですが、校内研の授業改善もあったことから、かなり速いペースだったと思います。

この取り組みを本格的に始めたのは平成25年度の2学期の9月に入ってからだったんですが、標準学力調査が12月にあり、“3か月半ぐらいの実践の結果、全ての学年で全国平均を超えました”。その後、市の協力もありまして、全学年で標準学力調査を実施しようということになり、その1年後(平成26年度)の調査でもことごとく全学年が全国平均を超えました。これにはさすがに先生方も驚きまして、「これぐらい力がつくんだね」と喜んでくれました。

【実践の結果】 東京書籍版 標準学力調査 算数 より

平成27年度 全児童840名



平成24年度から26年度までのA小学校の標準学力調査の結果(井口先生)

自分が赴任する前に行われた標準学力調査(平成24年度)では、先ほど全部全国平均を下回っていたとお話ししました。学年の経年変化をみると、例えば平成24年度の1年生は全国(の平均点)が83.2点のときに76.2点だったのが、1年後にテストしたときには全国が76.2点で、本校は81.2点まで上がったんですね。

さらに、その1年後に(平成24年度の1年生が)3年生になってテストしたときも、全国を超えていました。2年生も、3年のときは沖縄県のテストを受けたために実施しなかったと思うんですけど、4年のときに実施したときは全国平均を超えているということで、経年で見てもちゃんと伸びが確認できました。その結果を先生方は大変喜んでくれました。

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用

それから、取り組んで1年も経たないうちに全国学テを迎えましたが、驚異的な伸びを示しました。本校では、全国1位の秋田県の85.1点を超える86.6点が出て、さらにその次の年も秋田が81.2点のときに本校は82.5点まで上がりました。

思考力・判断力・表現力を問うB問題はどうかだったかというと、実施1年後は沖縄県の平均よりちょっと下回っていました。ところが2年後になりますと、沖縄県の44.7点を大きく超える50.6点で、このとき秋田が51.5点で、福井が50.2点ぐらいでした。全国2位のところまで思考力・判断力・表現力が伸びていったということですね。これが大きな変化です。

A 小学校の全国学力・学習状況調査の得点分布の変化

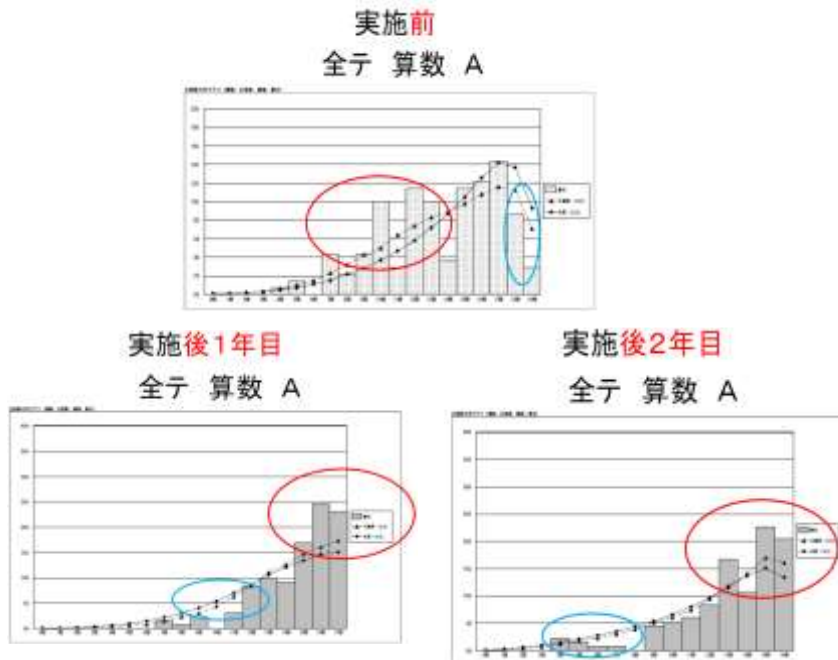
学校の実情としては、全国学力・学習状況調査の実施前の分布(次頁)なんですけど、右側が全問正解で、左に行くにつれて1問、2問、3問と間違えています。本校は、最初は中間層が多かったんです。全国の平均に比べて。ところが、丁寧な繰り返し学習をすることによって、山が完全に右寄りになりまして、2年目も完全な右寄りで安定しました。思考力・判断力・表現力については、実施前は下位あたりに児童が固まっていたんですけど、上位の子が増えまして、下位の子に一部苦手とする子がいたんですけど、2年目になりますと完全に中位・上位の子がふえて、下位の子が減ったというような結果になりました。

今回、算数しか載せなかったんですが、国語のほうも実は伸びていまして、そもそもの研究自体が算数だったので算数だけ載せている形となっています。

不登校がゼロになったというのは、繰り返し学習をすることでゼロになったというよりも、“学校を挙げて個と丁寧にかかわるということを徹底した結果じゃないかな”と。子どもたちが学校に居場所ができたというのが大きいのかなと感じています。

それから、中学校の先生方からも非常に学習が意欲的になったという声も聞こえましたし、あと保護者も非常に喜んでくれて、学力向上の発表会などをすると拍手をしてくれたこともたびたびありました。

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用



A 小学校の全国学力・学習状況調査の得点分布の変化

実践前は、いわゆる中間層が多かった。

しかし、繰り返し学習の実践1年目から高得点の児童が増え、
2年目も同様の結果に(井口先生)

それから、地域の退職教員もかなり学校とかかわってくれるようになりまして、雰囲気がいんなで学力を上げていこうという流れに大分変わったのかなと思っています。

A-7.測りにくい学力の向上

①繰り返し学習と学習意欲(井口先生)

【井 口】 この取り組みをしてひしひしと感じましたのは、一般的に繰り返し学習というと、「知識・技能を詰め込むんだ」みたいなイメージを持つかと思います。しかし、今回の取り組みでは、どうしても“先生や友だちとかかわることを仕組まないといけない問題に厳選”しました。その結果、“子どもたちのコミュニケーション力を伸ばす”ことにもつながりましたし、“学習意欲が非常に高まってきた”ことがどの学年の先生方も不思議に感じるどころでした。

それから、授業の中でも考える場面に集中できるようになったというか、基本的なことができてきているので、“問題解決的などころにしっかりとピントを絞って子どもたちができるようになってきた”というところも大きいと思います。

②不登校児が0名に

【井 口】 保護者の中に特殊なケースがなかったのも大きかったかもしれないです。「子ども

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用

を絶対集団の中に入れたくないんだ」というような保護者がいかなかったのも、幸いだったと思います。しかし、この繰り返し学習云々の前に、“先生方が個とかかわることの大切さに気づかされたなかで進めていった結果”だったと思うんです。それが、不登校がゼロになることに結果的にはつながっていったんじゃないかと感じます。

③ノートを隠さなくなった

【井 口】 自分も、実は他校の校内研によく呼ばれることがあって、そのときに往々にしてあるのが、授業中どれぐらいノート書けているのかなと見ると、子どもたちが大体ノートを隠すんですよ、見られたくなくて。

ところが、自分の取り組みをした学校で明らかに変わったのは、“ノートを隠す子がいなくなった”んですよ。これもまた大きな変化だったなと。“わからないことがあっても隠さずに何か知りたい”みたいな、そういう態度が見られるようになりました。

A-8. A 小学校の成果(まとめ)

(1)今回の実践前の状況

①学力について

全国学力・学習状況調査の平均点は、平成 25 年度は A・B とともに全国最下位だった沖縄県の平均点よりさらに低い。

②学力向上に向けた取り組みの状況

放課後に子どもを残して、できない子に特訓するなど、毎日多くの学習プリントを与えても、思うように学力が向上しない。先生のやる気に反比例するように、子どもは意気消沈している。

(2)今回の実践のポイント

①各学年用の「定着診断テスト」(学習プリント)を作成。指導については、学級担任の協力を得る。

②繰り返し学習の方法を見直し、数回の繰り返し学習と、問題の与えっぱなしではなく、必ず簡単な説明をする。

③個人の得点を管理し、繰り返す回数の基本は4回以上。正答率が80%以上に到達するまでとする。

④ダラダラと時間を使って指導するのではなく、日課表に 15 分だけ復習の時間を設け、その時間内に個別指導を行う。(子どもひとり一人とのコミュニケーションを大切に)

(3)実践の成果

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用

①全国学力・学習状況調査において、平成 26 年度は算数 A で全国平均を上回り、平成 27 年度は算数 A・B とともに全国平均を上回る。

②標準学力調査において、平成 25 年度・26 年度は全学年が全国平均点を上回る。

③約 800 名の児童が在籍しているが、不登校児は 0 に。

- ① 校区の中学校の教員から、A 小学校から進学した生徒が変わった(よくなった)と言われた。

A-9. 正答率の変化点以後の個別学習について

くり返し学習で、正答率が直線的に上昇していたが、上昇が少なくなった変化点で、学習者全員に同じ学習プリントの提供は止めて、この時点で正答者と誤答者にそれぞれ違った課題を提供された。

- (a) 正答者には、発展的な課題を提供
- (b) 誤答者には、より基礎的な課題を提供

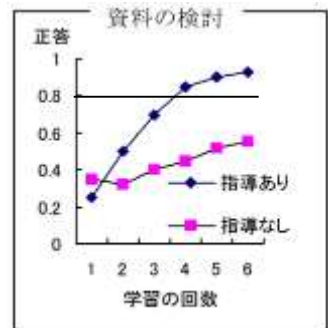


図8-21 くり返し学習の正答率の変化点

このようなくり返し学習の正答者、誤答者に適応した課題(問題)の作成は、当時、井口教頭が努力して作り、先生方に提供されていた。さらに 15 分の復習の時間に個別学習の指導をされていた。

(変化点で正答者、誤答者もそれぞれの学力に対応した課題(問題)が提供されるため、成績のよい者も困る問題があり、個別指導を受けていた。)

このような努力が、大きく学力・学習状況調査の平均点が他の学校より向上したと考える。

A-10. 教育リソース(教材・学習材)、デジタルアーカイブの活用

このような個別学習の教材・学習材の作成・提供は、多くの作業が必要であり、今後、教育リソース・デジタルアーカイブと学習状況の検出(主にコンテキストデータ)と学習歴を用いて新しい AI、生成 AI 等の教育用のツールを開発し、個別の資料提供(情報端末や学習プリント等)を可能にすべきである。

とくに、今後は教育の質の向上と教員の負担を少なくする観点で、個別学習の自動化の機能もある新しいシステムの開発が必要である。

そのためには、まず、教育リソース・デジタルアーカイブ(とくに教材データベース)の整備が大きな課題である。

(井口憲治)

[巻末資料]

8—8. 教育リソース DA を利用した学校文化の形成(宮城先生の実践例)
～学習指導力、学力の向上に適用～

8—8—1. 教頭だより

宮城卓司先生は、手引きをさらに説明を加えて全員に提供された。

[教頭だよりの構成例]

教頭だよりに説明と QR コードを付け、これを用いて先生方はパソコン(またはスマートフォン)で授業の映像を見ることができます。これを教育委員会、教育センター等で作成し、通信ネットワークを用いて提供するのも一つの方法です。

※ プライバシー(顔を記録しないように注意)

教頭だより

No43
 2015 年 2 月 20 日
 宮城 卓司

== ☆ センター研究発表会② ☆ ==

前回の秋田大学、阿部先生の講演の続きです。
 以前の学力調査で全国の 40 位近くだった秋田県が、今回の調査の殆どの教科でずっと位をキープしている理由として、次の点をあげていました。

※ () 内は全国学力学習状況調査での全国平均と秋田県の差

- 1 熱心に授業に向かう子ども
- 2 話し合い、意見交換を重視した「探究型」「課題解決型」学習
 - ・授業で友だちと話し合う活動 (+12.9%)
 - ・児童・生徒の発言や活動の時間を確保 (+15.5%)
 - ・授業で自分の意見を発表する機会 (+9.2%)
- 3 授業の冒頭に「めあて」、最後に「振り返り」
- 4 家庭での学習習慣の定着
 - ・家で学校の復習 (+36.7%)
 - ・自分で計画を立てて勉強 (+19.6%)
 - ・家庭での学習方法を児童・生徒に指導 (+29.3%)
- 5 学校―家庭―地域のつながり・連携
 - ・保護者に対し、家庭学習を促す働きかけ (+14.0%)
 - ・全国学力の結果を家庭・地域に公表・説明 (+15.2%)
 - ・地域の行事に参加 (+13.5%)
- 6 質の高い授業研究システム(チームで取り組み協議で研究する)
 - ・教育目標達成の方策を教職員で共有し取り組む (+10.4%)
 - ・学校全体の学力傾向や課題を全職員で共有 (+10.4%)
 - ・家庭学習の考え方を全職員で共通理解 (+24.0%)

この中で特に 6 に関しては、探究型の授業でも「時間が足りない」ということがない原因だと詳しく説明されておりました。ご存じのように、秋田県は教員同士での授業研究が盛んな地域です。こうして見てみると、今自分達の学校に何が足りないのか、次年度はどういった活動を行えばいいのが見えてくるような気がします。少なくとも家庭学習の方法の共通理解や普段からの授業研究を効果的に行う必要はありそうです。



※講演の様子はこの QR コードを読み取って下さい。(ID・PWは裏で入れます。)

図8-22 「教頭だより 2015 年2月 20 日号」(作成:宮城卓司先生)

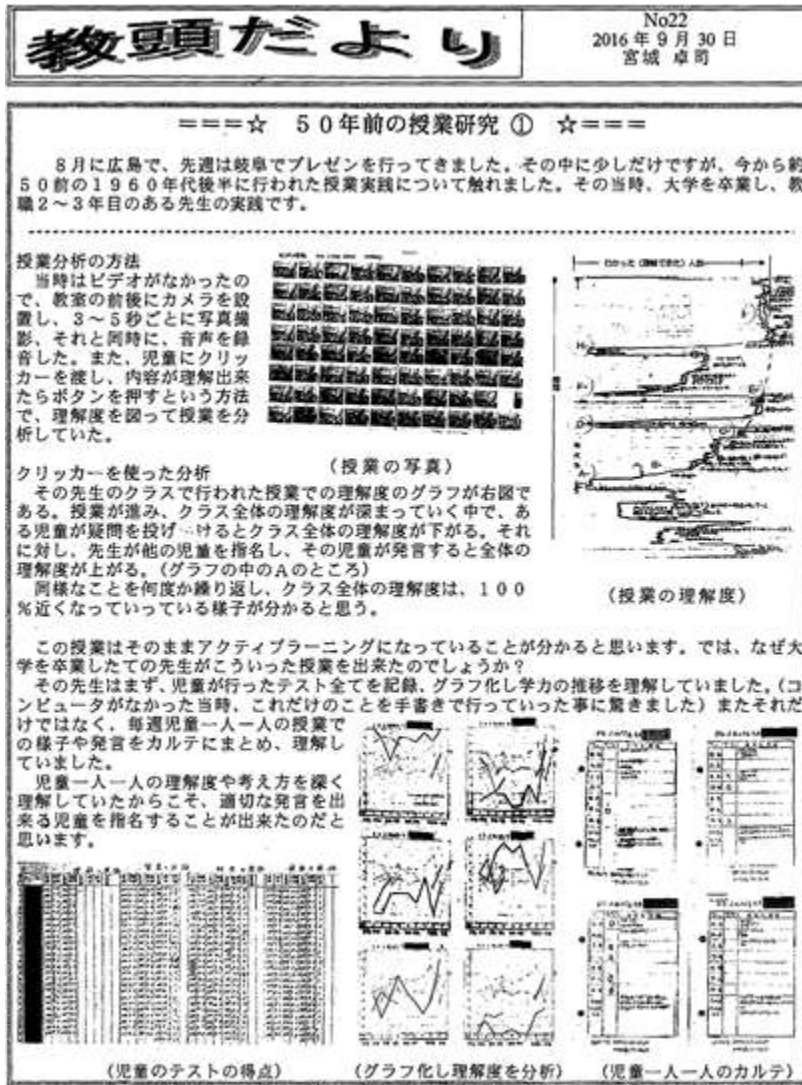


図8-23 「教頭だより2016年9月30日号」(作成:宮城卓司先生)

教頭先生が、教育リソース・デジタルアーカイブ(教育実践研究データベース)の中から選定しさらに学校に適する情報として再構成し、教頭だよりとして毎週、全校の先生に渡されていた。また、教育センター等の講演も必要に応じて全校の先生に役立てられるように書き直し、教頭だよりとして配布されていた。

教頭だより

No36
2015年1月9日
宮城 卓司

== ☆ 説明の必要性 ☆ ==

プリント等をさせっぱなしにしてはいけない。きちんと説明をしなくてはならないという話は良く聞きます。でも具体的に説明を与える場合と与えない場合で、どのくらい成績に差が出るかといったデータはあまり見たことがありませんでした。

右の表は以前岐阜大学で、小学生を対象に調査された言語に関する問題に対して、「指導の有無による習得率の変化」を表したものです。指導を与えずに、学習を6回繰り返した場合の習得率は50%程度までしか伸びていません。

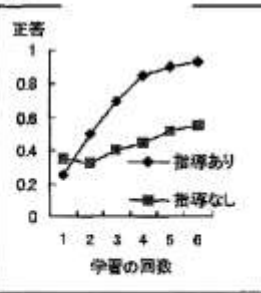
しかし、ちょっとした指導を行った場合は6回で100%近くまで向上しているのが分かります。

当然、全ての問題で同様なことが起こるのではないのですが、指導の有無による違いは明らかです。

来週から学力向上旬間がスタートします。webシステムにUPされた練習問題を中心に行う学年も多いかと思いますが、その際できるだけきちんと説明する時間を設けて、繰り返し学習させて欲しいと思っています。

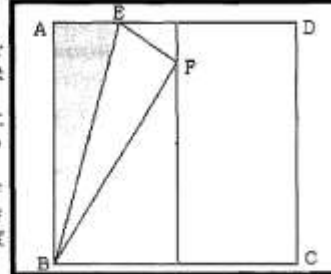
学力向上推進室の高木主事も「webテストを繰り返し対応してきた学校は、学力学習状況調査で明らかに成績が高かった」と話していました。

当然、時間に限りはありますので、満足行くまで全てを行う事は出来ないと思います。しかし先生方の希望をできるだけ叶えていきたいと思っていますので、相談がありましたら、連絡をお願いします。



学習の回数	指導あり (習得率)	指導なし (習得率)
1	0.30	0.30
2	0.45	0.35
3	0.70	0.40
4	0.85	0.45
5	0.90	0.50
6	0.95	0.55

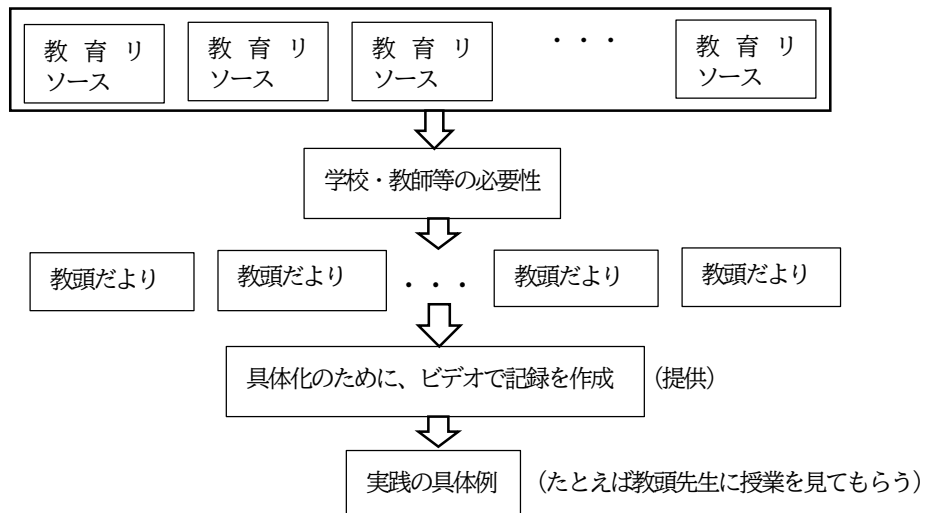
クイズ



右の図のように、正方形ABCDを2つに折って中央に折り目をつけ、更にその折り目に頂点Aが来るようにBEで折り曲げ、Aと重なる点をFとした。このとき∠EBFの角度は？



図8-24 「教頭だより 2015年1月9日号」(作成:宮城卓司先生)



教頭だより	No24 2016年10月14日 宮城 卓司
----------------	------------------------------

== ☆ 50年前の授業研究 ② ☆ ==

前々回、約50年前のある先生の授業研究の方法とそれをどう授業に活かしていたかについて書きました。この先生（岩田先生）は教職2年で、次のような方法で児童を褒めていました。（※下記の文での「私」は岐阜女子大学学長で教育工学の重鎮、後藤先生です。）

岩田先生のクラスに成績は悪くありませんが、横着な子がいました。岩田先生は、その子がいるクラスを脅迫して静かにさせることはしません。むしろその子は授業中に先生の顔をじっと見ています。なぜでしょうか。

ある日、教育委員会の指導主事が岩田先生の授業視察に来ました。その授業で、その子は仮説を立てて「こうなりますよ」と手を挙げて大衆よく発言してくれました。それに対して岩田先生はその場でほめませんでした。指導主事もその子のことを、昔から有名な横着坊主だと、知っています。そのせいか、「なぜあのとき（その子が発表したとき）に、あんなにいいことを言ったのに、先生はほめなかったのか？」と助言されたそうです。岩田先生はそれに対して反発せず「いや、すみません、すみません」と言っていました。

◎計画的で自然なほめ方
校長先生と私と岩田先生が校長室で話しているとき、岩田先生は私にぼそっと「あの指導主事、何もわからんね。」と言いました。私が「なぜ？」と問うと「あれは後からほめるつもりでいるから、あんなところでほめてしまったら、何にもならへんがね。」と言っていました。横着坊主からしてみると、単元の終わりでほめられれば「岩田先生は、俺のことを認めてくれる、ちゃんと知っててくれるんだ」となります。そうすると、次からはでたらめなことが言いません。一生懸命になります。

こんな話もあります。教育事務所の課長までされた先生が、以前に岩田先生の5年生のクラスを引き継いで、6年生で受け持ったそうです。その先生が5月頃に私の所へ来て「僕ね、あそこの岩田さんの後のクラス、1年かけて完全に壊してしまうと思う、恐ろしくなった。」と言うのです。岩田先生が受け持っていたときの状況が崩れてしまうだろう、と。あんな指導はできないというわけです。

◎実験の準備を児童達が主体的に始める
なぜかと言いますと、理科の実験室で自分だと「あれを持ってこい。これはこうしてやれ。」と、一生懸命に指示をしていた。ところが岩田先生のクラスを受け持った最初に実験室に行かせたら「全部僕らでやるのでいいわ。」と言って、実験器具を全部並べていたということなんです。

そして「さあ、やろう。」ということになったわけです。その先生は「私はあの授業はできません。」と言っていました。子どもたちは実験室に行くときは、きちんと目的を持って行っていたわけです。

ほめ方が一つだけの教師は、これは授業力のない教頭だと思います。どのようなほめ方をするかということなんです。

◎その後
当時の町議会議員のお孫さんが岩田先生のクラスに在籍していました。その孫の成長をみた議員さんが教育の力の素晴らしさを感じ「自分たちは麦飯を食べてでも、学校の校舎をよくする」と議会に働きかけました。そして国研等の協力を得て、当時としてはとても画期的な「I」を2つ併せた形の校舎を建築する事が出来た。新卒2年目の教師が議員を動かし、校舎を建築させたのです。

「当時、これだけ質実の美徳を醸成した褒め方を、戦後2年目の先生が出来たことなどでも驚きに感じます。（岩田先生は大学時代からとてもおとなしく、あまり目立たない方だったそうです。）その後岩田先生は、この学校を3年で転勤された後、次の学校ですぐに白血病になられ、亡くなってしまいました。教員生活はわずか3年半だったそうです。基本的に褒める方が子どものモチベーションが上がると言うことは実感として多くの方が感じていると思います。しかし、むやみに褒めるのは逆効果です。効果的な褒め方については次回以降に書いていきたいと思います。」

(当時建設された校舎)

図8-25 「教頭だより 2016年10月14日号」(作成:宮城卓司先生)

8-8-2. シンポジウムより実践例の紹介(宮城卓司先生)

[B 小学校の実践] ……教育理論や過去の資料（教育リソース）を総合的に利用～学校文化・学力の向上～

B 小学校の教育実践

B-1. 実践研究をはじめる前の学校の状況

(1) B 小学校の状況～要保護・準保護家庭が約47%～

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用



B 小学校教頭 宮城 卓司先生（当時）

【宮 城】自分が赴任したのは某市の B 小学校でした。その小学校に赴任する前は、沖縄県立総合教育センターのIT教育班というところにもいました。そこで一番の課題というか沖縄県全体の課題が学力向上でした。

学力・学習状況調査で沖縄はずっとずっと最下位。しかもほとんどの教科、ほとんどのテストでずっと最下位を続けていて、全テスト総合ではほかの県とかなり離れた状況で最下位だったので、これを上げて

ていくということが県教育界全体の課題でした。

そこで、私は岐阜女子大学大学院に進学し、その次に赴任した B 小学校にいる間に大学院で学修した内容を職場で生かしていく活動を行っていました。

当時私が赴任した学校の状況ですが、赴任した平成 26 年度の4月に行った学力・学習状況調査でこの学校が 48 番目の都道府県だったら何位になるかという数字を出してみました。すると、国語Aが48位、国語Bが43

学力・学習状況調査都道府県別順位

	国語A	国語B	算数A	算数B	総合
平成19年度	47	47	47	47	47
平成20年度	47	47	47	47	47
平成21年度	47	46	41	47	47
平成22年度	47	46	46	47	47
平成24年度	47	47	47	47	47
平成25年度	46	47	47	46	47
平成26年度	32	32	6	34	24

〇〇小学校 都道府県別順位

	国語A	国語B	算数A	算数B	総合
〇〇小学校	48	43	25	48	48

学力・学習状況調査都道府県別順位(宮城先生)

位、算数Aが25位、算数Bが48位で、総合でも48位。つまり、一番最下位の沖縄県にも全然及ばないし、全然点数がとれていないという状況でした。

	相対的貧困率		子どもの貧困率		ワーキングプア率	
1 位	沖縄	29.3	沖縄	30.7	沖縄	20.5
2 位	鹿児島	24.3	大阪	21.8	大阪	14.2
3 位	青森	24.1	鹿児島	20.6	京都	13.9
4 位	高知	23.7	福岡	19.9	高知	13.0
5 位	大阪	23.2	北海道	19.7	鹿児島	12.9
全国	全国平均	18.3	全国平均	13.8	全国平均	9.7

(2009 年調査)

その学校がどういった学校だったかというと、沖縄県は、相対的貧困率が 29.3%で全国平均より 10 ポイント以上高いんですね。子どもの貧困率が 30.7%で3人に1人ぐらいが貧困というような状況で、ワーキングプア率も 20%を超えているというような状況です。その沖縄県の中で一番要保護・準要保護の割合が高いのがこの市なんですね。その市の中でも一番高い

のが、私が赴任した学校で、大体47%、半分は要保護・準要保護を受けていて、恐らく相対的貧困率で言うと6割から7割ぐらいにはなるのではないかなというところなんです。

校区内には3カ所団地があって、子どもたちは、3分の1は団地、残り3分の1はアパート、残り3分の1が戸建ての家に住んでいるんですけど、その戸建ての家の多くが、お母さんが離婚して実家に戻ってきたという状況が多く、自分で家を買ってその地域に住んでいるというのはクラスに1人か2人いるかいらないか、という学校でした。

そのため、様々な問題から多い週では週に3日から4日、児童相談所や警察が来て子どもたちについての会議を行っていました。

(2) B 小学校の児童の学習課題

～プリントをさせても、学力は向上しなかった～

【宮 城】 私が赴任した当時の学校の学力の状況なんですが、子どもたちの家庭状況もかなり厳しく、保護者の中には精神的な課題を持った方も多いですし、知的な課題を持っている方も多く、母子家庭の割合もかなり高い。

家庭環境は、沖縄県の中でもトップクラスの厳しいところで、家庭には全く期待できない。“家庭に期待できないという前提で努力してきた学校”です。そのため基礎的な力をつけるために、毎日山のようなプリントをやっていました。

多くのプリントをこなしているおかげで、算数Aの問題は例年比較的好い点がとれていました。全国平均近くとれていたのですが、そのかわりB問題は全然とれていない。年度によってはいい点数をとるときもあるのですが、課題としてはB問題だったというような状況です。

B-2.先生方や保護者の状況

(1)先生方や学校の状況と学習指導の取り組み

【宮 城】 私が赴任した当時の学校の様子ですが、職員の机に毎日山のようにプリントが置かれるんですね。そのプリントを先生方は放課後5時とか、場合によっては6時ぐらいまで子どもを残して補習させていました。それを処理し切れないうちに、子どもたちは朝登校したらすぐに新しいプリントをこなし、放課後もやるというような状況でした。「子どもたちがわかるまで帰さない」という考え方でやっていたんですけど、実際先生方は毎日終わることができないプリントが机の上にどんどん置かれていく、それが処理し切れなくて教室にどんどんたまっていく。

職員からは、“それを見るだけでも正直ストレスです”というような意見が上がっていました。

ただ、それに対してほかのやり方が浮かばない。ほかにどうやって厳しい環境にある子ども達の状況を改善していくのかということが、具体的にはわかっていないというような状況でした。

【宮 城】 子どもたちの生活態度なのですが、かなり家庭的に厳しい子が多い割にはそんなに悪くなくて、私がいた3年間に万引きで指導した子というのはゼロだったんですね。ただ、そのかわり保護者がかなり厳しい家庭の子が多いので、何かあったら学校に来なくなる、不登校になる子はかなり多くいました。

学習態度にしても、“とりあえずみんながやっているからやるんだけど”というような感じで、

主体的ではないんですね。受け身な学習態度がかなり感じられました。

(2)保護者や児童の状況

【宮 城】まず、今回の実践を始めようと思ったのは、いわゆる知識・理解を問うような算数のA問題はいい点数をとれた年度が結構あったんですね。学校としては学力的にすごく低いのがずっとずっと続けているという学校ではなくて、かなり波があるというような学校でした。知識・理解についてはある程度詰め込みでやっていったのでとれていた。けれど、この子たちが中学校に行ったら、成績が市内でもほとんどずっと最下位。かなり厳しい地域なので、もう中学生になったら子どもたちのモチベーションが続かないんですね。だから、そこをどうしても変えていきたいと思い“子どもたちが主体的に学習していく方法”を探っていくことを始めました。

そして、保護者は、子どもたちの学習にまで気が回らないというか、いろいろ学校に要望を言ってくるような地域ではないんです。みんな自分のことで精いっぱいというような地域でした。児童についても、かなり詰め込みで学習しているので、モチベーションは低い。それを主体的に変えていくことが課題だと感じていました。

職員や周囲からの反対は特にありませんでした。でも、やっぱり今までのやり方を変えていくことに抵抗感がある先生方というのは結構いると思うんですよ。その抵抗感をなくすためにいろいろな手立てを打っていました。

B-3.先生方への援助や手立て

学力向上は授業改善を中心に

①まずは理論から

【宮 城】私は、教育センターのIT班から赴任したので、たいていの先生方は「おそらくパソコンおたくだらう」ぐらいにしか思っていなかったと思うんですよ。IT教育班だから学力向上については専門と思われていないだろうと感じました。それで“最初に始めたのが『教頭だより』”です。毎週『教頭だより』で学力向上を中心に学級経営などについて伝えていくようにしたんですね。

それを行っているうちに、校長先生から「校内研でプレゼンしないか」というような話があって、夏休みの校内研で2時間ほど時間をいただいてプレゼンをしました。

このときに授業の理論などを伝えていきました。そして、学校の学力向上の中心になる先生、特に算数加配の先生が私と一緒に赴任した職員だったので、その先生と一緒に、「うちの学校はプリントをいっぱいやって知識・理解はできているんだけど、課題としてはモチベーションが続かない。さらにB問題が全然解けないことだよな」という話をしていました。そして、学力向上を授業改善にふってこういう事を放課後よく一緒に話していました。

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用

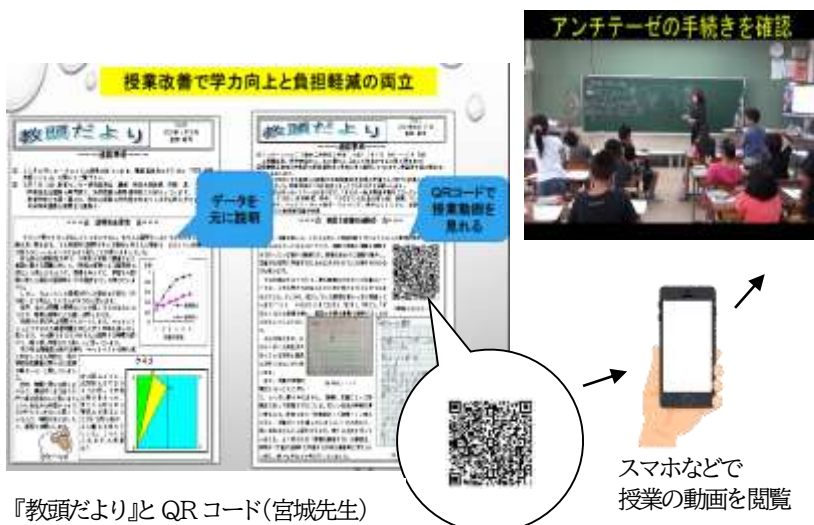


校内研修会の様子(宮城先生)

②理論を具体化し、適用する

まず、先生方に授業を変えていっていただくためには、その基礎となる理論をきちんと理解していただかないといけない。その理論を毎週『教頭だより』で伝えていきました。理論は伝えていったのですが、“先生方は理論がわかるだけでは、実際に授業を改善できるかといったらなかなかできない”んですね。そのため、実際の授業でその理論をどう生かしていっていいのかわかってもらうために、『教頭だより』の中にQRコードを埋め込みました。QRコードをスマートフォンで読み込むことによって授業の動画をみられるようにして「こうした理論を生かすには、こういった授業ですよ」という内容を、動画で授業実践をみていただけるようにして配付しました。

このQRコードの使い方も後藤先生からお伺いした方法を活用し、実践しました。また、QRコードでみられる短い動画だけではなく、実際にその授業全体の流れをみられるように学校のサーバーに授業動画のファイルを入れました。教育センターに勤めていた時から将来的にはデジタルアーカイブの中に入れていくことができるようにという思いを持って撮りためていた動画が100時間以上あり、その動画を全職員がみられるようにしました。



『教頭だより』と QR コード(宮城先生)

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用

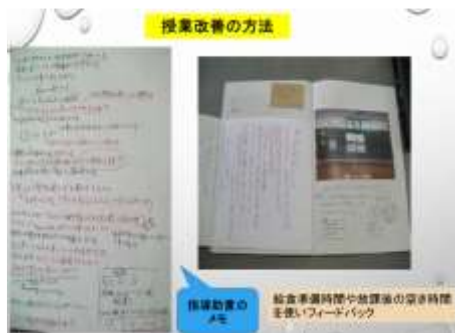
放課後よく先生方と一緒にこの動画をみながら授業改善の方法を「この発問についてはどう」とか「この問題の提示の仕方についてはどう」というようなことを具体的に記録していきました。

また、職員が次の授業で行う授業と同じ単元をやっている授業の動画をみて、授業改善の方法を探ることをしていきました。

さらに理論を理解してもらうために、さまざまな講演会などの動画もみられるようにしました。

先生方は「理論がわかった」次に「実際授業でどういったふうにやっていったらいいのか」が授業の動画をみてわかる。でも、実際に自分の授業でそれができるかといったらなかなかできないんですね。だから、「実際に先生方の授業の参観」をして、最低でも年50時間以上、多い年は100時間以上、1時間張りついて授業を参観して、改善策を伝えるというような活動をやっていきました。

A4の裏紙に改善策を書いて、給食準備時間とか放課後のときなどの、ちょっとした空き時間にフィードバックするというようなことをやっていって、ふだんの授業を改善していく活動に取り組んでいきました。



年 50 時間から 100 時間の授業を参観して、改善点などを授業者にフィードバック

指導助言メモの一部(宮城)

B-4.まず先生が変わった

データで語ることの大切さ(宮城先生)

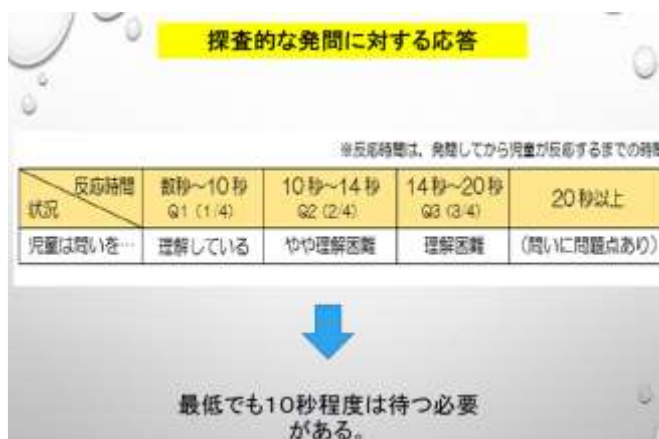
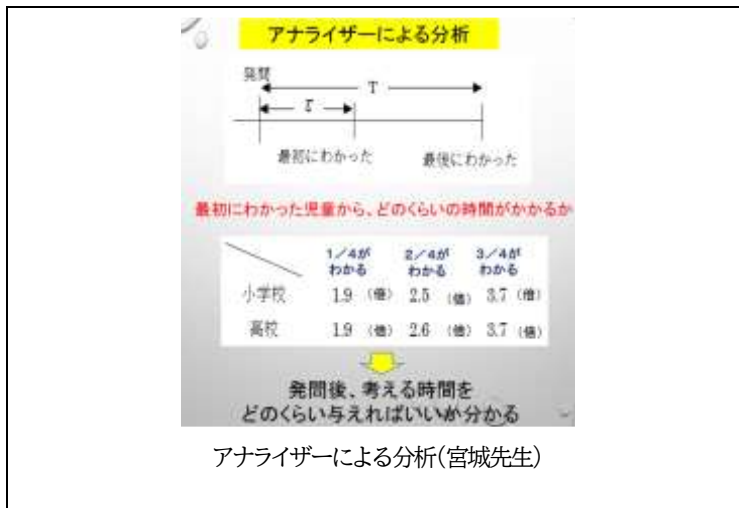
【宮 城】先ほど、先生方の授業を 100 時間以上見たというような話をしたんですけども、先生方のほうから「できるだけ授業を見に来てください」と言ってくれることが増えていったんですね。多い日は1日4時間、1時間目から4時間目までずっと授業を見て午後にフィードバックを行うということをやっていました。授業を見てくださいと言ってもらえるために一番気をつけたのが、実際にデータで語るということです。

①発問についての指導

例えば、これは先生方の発問の意図を子どもたちが理解するまでどのぐらいの時間がかかるのかというデータです。よく「沖縄県の先生方はしゃべり過ぎて、子どもたちが考える時間がない」というような話を聞くのですが、ただそれを伝えるだけではなくて、

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用

「発問後、子どもたちの考える時間はクラスの4分の3が理解できるようになるには、最初にわかった子の大体 3.7 倍ぐらいの時間を与えたら内容を理解できるよ」というように、具体的なデータを使って説明するようにしました。



探査的な発問、つまり思考を要する発問をしたときに、子どもたちにどのぐらい時間を与えたら課題の意味を理解できているのか。10 秒以内に反応する子は、ほとんどきちんと理解できているけれど、14 秒ぐらいだったらちょっと難しくなってくる。20 秒以上たったらもう先生の発問の仕方自体が悪いんだから、発問の仕方を変える必要があるといったことをデータで見てもらいながら話すようにしていきました。

②グループ討論と全体討論についての指導

これは今、日本中の学校が取り組んでいるグループ討論と全体討論についてのデータですが、実はグループ討論と全体討論の理解率というのはそんなに変わらないんですね。

変わらないんだけど、所要時間はグループ討論よりやっぱり先生が中心になって行う全体討論のほうが時間が短い。

じゃあ、全体討論のほうが理解する上では有効なのかというと、実はそれだけではなくて、“子どもたちは自分が思ったこと、頭の中にある考えていること、内言を外言化することによって思考が整理されたり定着されたりする”。

そういった意味でもやっぱりグループ討論でいっぱい外言化する必要がある。こうしたことをできるだけデータを使って説明する。先生方の腑に落ちるように伝えるということに気をつけていきました。こうしたことを行っていった結果、先生方から授業を見に来てくださいと言われてもらえることが増えたんですね。

③お互いに授業を見せ合うように

年度の後半になるんですけども、ちょっと気になるクラスがあって、そこに私がかなり関わる必要がでてきました。そのため、授業についての話し合いに参加できなくなっても先生方だけでこうした話し合いを続け、お互いの授業を見合ったり、主体的に協力し合って動くようになっていきました。

④先生方が腑に落ちることの大事さ

【宮 城】腑に落ちてもらうように伝えないと、次「授業を観てください」と言ってもらえないんですよ。そのため、ここを一生懸命考えたというか、気をつけたところではあります。

これは、先生方の授業を観せてもらった後で、岐阜女子大学がつくった資料をもとに、「子どもたちが発問を理解するにはこういった手順を追っていくから、やっぱりある程度の時間は必要だよ」というような、データを見てもらいながら説明するといったことをやりました。

つまり、“待つということをどうするか”。発問しても待たずに先生が話したら、子どもが論理的思考はできません。その辺のところがやっぱり大事なところでしょうね。グループ討論もそうですし、先生と子どものコミュニケーションもそうですし、そこを全部資料をもって説明してきました。

先生方の行動、今までの考え方と授業方法を変えていただくためには、それをやっていかないといけないと感じています。すぐには先生方もこれまでのやり方を変えてくれないと思うので、授業を観て一緒に改善方法を考えていくという活動を繰り返し繰り返し行い、伸びて

グループ討論と全体討論について			
課題解決状況			
	Q ₁	Q ₂	Q ₃
グループ討論	50%	69%	87%
全体討論	53%	73%	87%
所要時間			
	Q ₁	Q ₂	Q ₃
グループ討論	22分	30分	40分
全体討論	12分	16分	24分

グループ討論と全体討論について(宮城先生)

いったと思います。

B-5. 具体的な進め方

子どもたちの顔が変わってきた(宮城先生)

①3年間継続して指導

【宮 城】先ほど話したように、まずは『教頭だより』で理論を伝えていって、授業動画を実際に見ていただいて、具体的な授業のやり方を理解してもらう。そして、その後、実際に先生方の授業を見て一緒に改善していくというようなことをやって、それを繰り返しやっていきました。それをずっと3年間続けていたということになります。

②気になる児童への対応

保護者の中にも様々な課題を持っている方が多い地域の子どもですので、様々な課題を持っている子もかなり多いんですね。そういった子に対しては、いろんな機関と連携しながら知能検査などをやっていながら、本人の得意分野、苦手分野とかを探っていくことを行いながら、実際授業を見て、「この子にはこういった対応をしていこう」などと、相談をしていきました。

③常に職員と一緒に考える

先生方に信頼してもらえるようになるためにも、こういった子に対する対応を常に一緒に考えていたのが、自分が行った学力向上の面と、あと一つの大きな柱だと思っています。常に職員と一緒に考える。管理職なので担任に任せるとかいうことではなくて、そういった子のお母さんには「検査を受けたら」というような話って、“けっこう担任は言いにくいんですよ”。保護者との関係が悪くなった場合に、担任が「あの先生にこんなことを言われた」ということになり、信頼をなくしてしまったら困る。しかし、自分は教頭なので私のほうから常に言うようにしていました。「お母さん、お子さんには、こういった行動があるのですが、こんな対応方法があるよ」というような事を伝えていました。その方が、保護者がそっぽを向いても担任との関係は悪くならないのでいいと思い、授業参観のときに、「お母さんちょっと来て」とかいう感じで話していました。授業参観の間中、ずっとずっと回って、1人ずつ対応していく。こうこうこういった対応をすると、こうなるはずみたいな話をずっとしていきました。

成果が見え出したのは、やっぱり授業参観をやり出して先生方の授業が変わってきて、2学期、年末あたりです。先生方の授業が変わってきたし、子どもたちの顔が変わってきたなあとというようなふうに感じました。

B-6. 苦労したこと、成果

この子たちから学校を変えていける(宮城先生)

①学力向上の成果

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用

【宮 城】まず、赴任して1年間学力向上の取り組みと授業改善に力を入れていった結果、全国学力学習状況調査で国語Aは全国平均よりちょっとだけ上なだけだったんですけど、国語Bが都道府県別でいうと4位、算数Aが3位、算数Bが4位、理科が1位、総合では都道府県別で秋田県までは及ばなかったんですが、4位ということです。全ての教科でこのように成績が上がっていきました。

授業改善の結果					
(学力・学習状況調査都道府県別順位)					
	国語A	国語B	算数A	算数B	総合
平成19年度	47	47	47	47	47
平成20年度	47	47	47	47	47
平成21年度	47	46	41	47	47
平成22年度	47	46	46	47	47
平成24年度	47	47	47	47	47
平成25年度	46	47	47	46	47
平成26年度	32	32	6	34	24
平成27年度	32	13	6	26	20

〇〇小学校	国語A	国語B	算数A	算数B	理科	総合
平成26年度	48	43	25	48		48
平成27年度	22	4	3	4	1	4

全国学力・学習状況調査にみる授業改善の結果(宮城先生)

これが翌年の4月に行った学力学習状況調査の結果ですが、沖縄県は毎年2月に県の「到達度調査」というテストをやります。中学年以上全学年やるんですけど、この都道府県別で4位をとった子たちというのは、このとき市全部 16 校の中では2位だったんですよ。1位だった学校は、大体秋田と同じぐらいの成績だったんですね。ただ、それが2月のテストではその学校を軽く上回っていました。だから、多分卒業時には秋田平均は軽く上回ったんじゃないかなと思っています。それ以降も、県の到達度調査ではずっと市内 16 校中1位を続けて、最後の年は転勤だったので正確には分からないのですが、平均点よりかなり上でした。ずっとトップで中学校に上げられたという結果になっています。

沖縄県到達度調査(毎年2月実施)		
平成28年	市内16校中	1位
平成29年	市内16校中	1位
平成30年	市内16校中	おそらく1位
(県平均より7ポイント高い)		

沖縄県到達度調査(宮城先生)

②一番喜んだのは地域の方々

【宮 城】 保護者は、やっぱり学力が上がっていることについては、興味を持っていただけるというか、教育熱心な保護者はかなり喜んでいただきました。

しかし、一番喜んでくれたのが地域の方々なんですね。この地域がこんなに厳しいところだとわかっているからこそ、お父さん、お母さん方ができないから、自分たち地域で頑張るといふふうに学校に協力してくれる方がかなりいっぱいいらっしゃいました。その方たちが一番喜んでくれたと思っています。

③子どもたち同士をつなげる

中学校進学を意識した時、とても気をつけ、先生方に伝えていたのは、

「子どもたち同士を結びつけてください」ということ。

「子どもたちに課題を与えて、その課題をわからない子にわかる子が教える。そして一緒に問題を解く喜びを味わわせてください」という話をよくしていました。

「この子たちは、そのまま一人一人バラバラだと中学に行って、家庭環境も悪いから絶対ひねくれるよ。勉強なんか絶対にしない。だから、子どもたち同士をつないで、みんなで一緒に努力する」というような子どもたちにしてください」という話をずうっと言い続けて、実際にこの子たちが中学校に上がったときに、毎年学力が市内で最下位だった中学校だったんですけど、市内のトップのほうにぐんと上がりました。子どもたちはみんなとても前向きで、協力的で、そういった子たちでした。そのため中学校の先生方は、「この子たちから学校を変えていけると思います。ありがとうございました」と言ってもらえたんですね。

授業の中で子どもたちをつなげていって、課題を解決する喜びを味わわせる。そういった授業をやってくださいという活動を続けていった。それが中学校に上がったときに中学校の先生方からこうした意見をもらったのが、一番うれしかったことですね。

そして、保護者も喜んでいただきましたし、子どもたちもとても自信を持って中学校へ上がっていった前向きになったし、やはり地域の方がすごい喜んでくれたというのが大きいですね。

④先生方の精神的な負担が減った

学校には学習支援員がいます。学習支援員は春休みに補習させてくださいという決まりだったんですけど、「うちの学校は補習させません、次年度のために準備します」ということを言っても、教育委員会は「成果が上がっているからいいよ」と認めてくれました。やっぱり成果が上がっていったら、いろんな面が自由になってきます。

そして先生方の勤務面でもかなりよくなってきたというのと、あと授業改善についてみんなで話し合うようになってきていましたので、先生方が、「勤務時間はちょっと減った、でもそれ以上に一番よかったのは、職員みんながつながってきたのが精神的な負担が減った」というような話をよくしていましたね。

その時の職員とは今でも時々会うんですけども、先生方は「みんなで同じこと、学力向上について話をできるのってとてもいいよね」とか「雰囲気はよくなったよね」とかよく言ってくれますね。

B-7.測りにくい学力の向上

①前向きに勉強できる環境を整える



授業の様子(宮城先生)

【宮 城】知識はやっぱりとても大切だと思っています。私がいた学校は、その辺についてはかなり力を入れてやってきた学校で、それプラス、次にこの子たちに何が必要なのかというようなことを考えたときに、活用力だということで、授業改善を行っていきました。その中で、子どもたちの生活態度もかなり変わってきました。子どもたちが、学習自体をすごく楽しんでいる様子がこの動画でわかるんじゃない

いかなと思います。

わかる子は、クラスの中のわからない子に、どうやったらわかるようになるかを説明しています。

“わかることが楽しい”というような感じが伝わっていただけたかなと思います。こうした感じで、とても前向きに勉強していっているの、中学校に上がったときに、中学校の先生が、「この子たちから学校を変えていけます」というようなことを話してくれたのかなあと感じています。

井口先生のところでもそうなんですけれども、不登校の子がゼロになったということは、実は私がいた学校でも起こっていて、子どもたち、特に不登校になる子は発達的な課題を持っていたり、家庭的な環境の課題がとても大きいんですけども、そういった子が、いざ教室に入るとなったときに、教室が荒れていると絶対に入っていけないんですね。聴覚的に敏感な子とかだったら、もう絶対無理。でも、子どもたち同士がすごく前向きだと教室に入っていけるんですね。

不登校はとても多かったんですけども、“一旦全部ゼロにしました”。全員学校に来るようにして。ただ、私が異動になる前に、ちょっと家庭環境が厳しい子2人がまた不登校ぎみになって、最終的にはこの子たちが解決できなくて異動したんですけども。

その後赴任してきた先生は、この学校はこんなに厳しい学校だということはあまり気づかないようで、「今、学校はとても落ちついてますよ」というような話をいろいろなところで聞きます。

だから、“子どもたちが前向きに勉強する環境を整えること”が、やっぱり子どもたちの生活

態度もよくなるし、少なくとも、家でつらくても学校に行ったら友達がいるよとか、友達と一緒に
なら楽しいよというようなことを思ってもらえたのではないかなと思っています。

②確かな指導法の確立と学ぶ力の育成

“先生方の指導法がはつきりしてきて、こうやれば、子どもが授業に乗ってくる”ということが
わかったということ、もう一つは、子どもたちに“学ぶ方法が身についた”ということ。単なる知
識・理解の他に、学び方も身についたということね。これが僕は大きな要因じゃないかなと思っ
ています。それにはどうしたらいいかという具体的な方法を提供したのが岐阜女子大学の
データなんですね。

子どもたち同士で学んでいけるようにする。子どもたちが学び方をわかっていると、先生が
何か刺激を与えると、いい反応が来る。それにより先生自身が授業を楽しむという、いいサイ
クルが起きているのが、授業の様子を見ていただけたらわかると思います。

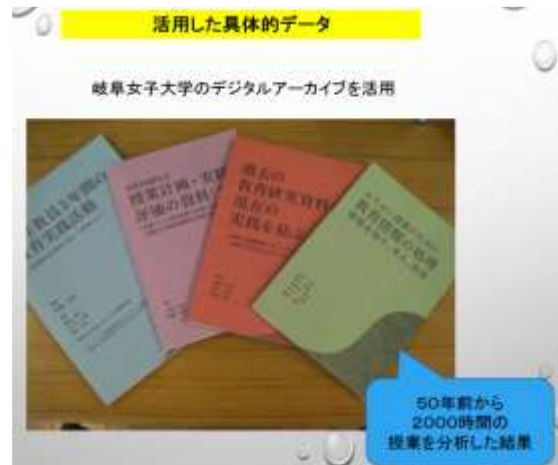
③学校を変えていかないといけない

【宮 城】まず中心となる知識を与える方法というのは、今まで先生方ずっとやってきて、それ
についての支援がしっかりしていました。でもそれだけじゃないよねということを実際には先
生方が思っていて、課題意識を持っている先生が何名かいるところに私が赴任してきた。さら
に一緒に赴任してきた先生が、学校の中心となる研究主任でした。この研究主任の先生が、一
緒に授業改善をやっていきました。この先生と、算数専科の先生がひとりいて、この人たちを
中心に授業改善を行い、「この学校をやっぱり変えていかないと、先生も子どもたちも本当に
成果が上がる方法に変えていかないと、中学に行ったら全部崩れるね」と話していました。“授
業改善による学力向上という方向性が統一できた”のが一番よかったのではないかなと思っ
ています。

当然、どこの学校でも恐らくそうだと思うんですけども、今までのやり方を変えたくない
先生っていっぱいいますよね。うちの学校はこういった特徴だから、こんなことをやっている
んだよと。でも、そうではなくて、その中にある課題を解決していこうというようなことで方向
性を統一できた。だから、研究主任や算数専科の先生は、よく頑張ってくれました。
ほかの人の気持ちを変えていかないといけないということは嫌な目にも遭うし、つらい思いも
しますが、歯を食いしばって頑張ってくれました。残りのあと1人、算数専科の先生も、自分達
が赴任する前からいたんですけど、“学校を変えていかないといけないという強い思い”を
持っていたのが、成果を出せた要因なのかなと思います。

8. 教育リソース・デジタルアーカイブの利活用

あと、“職員同士が比較的仲がよかった”ということもあるのかなと思っています。職員同士ばらばらだったら、ほかの人がどんなに頑張っているのかわからないと思います。「そっちだけやっておけばいい」みたいな感じになるんですけど、そんな雰囲気はなかったの、みんな何となく「今までのやり方はとてもきつ過ぎる、しかも小学校のときはいいけど、中学校に行ったら成果が上がらない、どうしよう」というような思いを持っているときに、私が具体的な大学院で学んだデータを持って入っていったということが大きかったと思っています。



活用した具体的データ(宮城先生)

B-8. B 小学校の成果(まとめ)

(1) 今回の実践前の状況

① 学力について

平成26年度の学力・学習状況調査で、総合すると全国最下位の沖縄県の平均点よりさらに下であった。

② 学力向上に向けた取り組みの状況

基礎的な力をつけるということで、毎日山のようなプリントをやっていたが、終わらせることができない山のようなプリントで先生方もストレスに感じていた。

(2) 実践のポイント

① まずは授業改善との思いで、先生方にその基礎となる理論をきちんと理解してもらうために、毎週『教頭だより』で理論を伝えていった。

② 実際の授業でその理論をどのように生かしていったらいいのかをわかってもらうために、『教頭だより』の中に QR コードを埋め込んで関連する授業や講演会の動画をみられるようにした。

③ 先生方の授業を最低でも年 50 時間以上、多いときは 100 時間以上、1時間はりついて観て、改善策を伝えた。

- ◆自分自身が「授業を観て欲しい」と思われるようになること
(ポイント)クラスの課題と一緒に考える
・発達の課題、不登校、生徒指導など
- ◆指導助言の1回1回が勝負
(ポイント)納得できる具体的な改善方法を伝える
・データで根拠を伝えるなど

授業改善をする上で気を付けたこと(宮城先生)

(3)実践の成果

- ①全国学力・学習状況調査において、国語Aは全国平均より少し上、都道府県別でいうと国語Bが4位、算数Aが3位、算数Bが4位、理科が1位、総合では都道府県別で4位になった。
- ②沖縄県の「到達度調査」で、平成28年度、29年度に同市内の小学校16校中1位になった。
- ③授業改善についてみんなで話し合うようになったことで、先生方の精神的な負担が減った。
- ④経済的に厳しい地域が、学校に協力的になった。
- ⑤進学先の中学校の先生から「この子たちから学校を変えていけると思います、ありがとうございました」と言われた。

このように、沖縄で最も貧困率が高い地域の学校が、2013年当時、確かな学習指導と学校・教師の努力で全国学力・学習状況調査の調査問題において全国最下位の沖縄県の平均点より下位の学校が全国的にも上位へ向上しました。

(宮城卓司)

[メモ]

沖縄のB小学校の教育実践は、教頭が主となり、研究主任、教務主任等が支援して、実践研究を推進し、校長は教育実践研究の方向性を見定、支援し、学校文化を形成した例である。

また、この教育実践を支える過去の資料(教育リソース)を新しい教育理論を取り入れ、各先生方が腑に落ちる資料提供がいかに重要かを示している。(尚、ここで用いた教育実践研究資料(教育リソース)は、岐阜県、愛知県の小、中、高等学校の学習システム研究会の先生方の協力で、1967年～1980年に収集・整理した資料である。)

[宮城先生の実践より]

手引き・資料の活用として、宮城先生は次のように注意されていた。

①手引き・資料を理解する

手引き・資料の提供を受け、指導方法等を理解しても、実践できるとはかぎらない。

②具体化……授業を見る

手引き・資料の具体化が必要である。

その方法としては、研究授業等を見て実践力をつけるのもよい。しかしいつも可能とは限らない。そこで、教頭先生、研究主任の先生で良い授業例をベテランの先生にお願いし、学習者の個人情報に注意し、実践例を撮影し、デジタルアーカイブとして保管する。これを手引き、解説書等に二次元バーコードを用いて実践例を見る。

③実践（先生方の実践）

具体的事例を参考に、実践をする。

実践にあたって、可能であれば教頭先生、研究主任等の先生にお願いしてみてもらい、指導を受けるのが良い。

◎「理解⇒具体化⇒実践」が重要である。